ISSN 0918－1946

調 査 年 報 11

平 成 10 年 度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

調 査 年 報 11

平 成 10 年 度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

キウス４遺跡Ｊ地区　17号周堤墓確認（北東から）

キウス４遺跡全景（平成９年空撮、上が北）

キウス４遺跡Ｒ地区　盛土遺構調査状況（南西から）

目　　次

Ⅰ　平成10年度の調査

1　調査の概要 …… 1

2　調査遺跡 …… 3

柏台１遺跡 …… 3

中野Ｂ遺跡 …… 7

白滝遺跡群 …… 9

服部台２遺跡 …… 11

奥白滝１遺跡 …… 14

上白滝５遺跡 …… 17

上白滝６遺跡 …… 19

上白滝７遺跡 …… 19

上白滝８遺跡 …… 20

北支湧別４遺跡 …… 20

滝里遺跡群 …… 23

滝里安井遺跡 …… 24

滝里11遺跡 …… 27

滝里９遺跡 …… 30

滝里32遺跡 …… 30

滝里26遺跡 …… 32

滝里12遺跡 …… 34

滝里16遺跡 …… 34

滝里17遺跡 …… 34

滝里２遺跡 …… 34

滝里３遺跡 …… 34

富野３遺跡 …… 37

山崎４遺跡 …… 39

キウス４遺跡Ｇ・Ｊ１・Ｊ３～Ｊ６地区 …… 41

キウス４遺跡Ｊ２・Ｒ地区 …… 47

キウス４遺跡Ａ２・Ｑ地区 …… 53

キウス５遺跡 …… 61

キウス７遺跡 …… 63

ユカンボシＣ15遺跡 …… 65

ユカンボシＥ７遺跡 …… 71

3　研修・研究会等 …… 75

4　資料貸出し等 …… 77

5　刊行報告書等 …… 82

6　組織・機構 …… 83

北海道史略年表

本州の時代区分	年代（西暦）	北海道の時代区分		H10. 調査遺跡のおもな時期
明治～平成	A.D.1900	（近代・現代）		
江戸時代		近世	アイヌ文化期	ユカンボシC15
室町時代	A.D.1600			
	A.D.1300	中世		
鎌倉時代	A.D.1200	擦文時代		ユカンボシC15
平安時代	A.D. 800			
奈良時代			オホーツク文化期	
古墳時代	A.D. 600			
	A.D. 400	続縄文時代		滝里11・26
弥生時代				滝里安井、滝里 9・32
縄文時代	B.C. 300	縄文時代	晩期	
	B.C.1000		後期	キウス4
	B.C.2000		中期	山崎4
	B.C.3000		前期	キウス4、滝里12
	B.C.4000		早期	キウス4・7、滝里12 富野3
	B.C.8000			
旧石器時代	B.C.20000	旧石器時代		白滝遺跡群 柏台1

凡例（本文）

- 「2　調査遺跡」各遺跡名の後に付けた括弧内の記号は、北海道教育委員会の埋蔵文化財包蔵地登載番号である。
- 各遺跡の位置図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図『長都』『千歳』『野花南』『島の下』、5万分の1地形図『長万部』『渡島双葉』『恵庭』『千歳』『白滝』、20万分の1地形図『室蘭』を使用した。

Ⅰ　平成10年度の調査

1　調査の概要

今年度は道内の5市町村に所在する計24遺跡で発掘調査を実施した。このうち11遺跡は昨年度に続く調査である。原因工事別にみると、北海道開発局の各建設部が実施するダムあるいは国道の建設や改良に伴う調査が18遺跡、日本道路公団が実施中の高速道路建設に関連するものが6遺跡である。このほか整理作業のみを実施したものが2遺跡ある。

以下、調査の成果を時代順に要約する。

旧石器時代

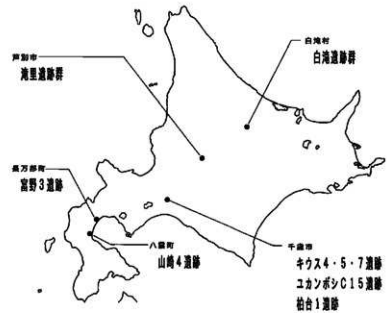
柏台1遺跡において昨年度に続いて出土した細石刃石器群の時期が、約2万年前に遡ることがほぼ確定的になった。今回、この石器群の中から発見された琥珀玉は、湯の里4遺跡（昭和58年度調査）に続く国内2例目のものである。昨年度の調査区から続く樹木痕も検出されており、ユカンボシC15遺跡で発見された同時期の埋没樹林跡とともに、古環境を知る上で貴重な資料となろう。

白滝遺跡群では7遺跡を調査した。平成7年度からの調査で出土した遺物は約300万点に及び、石器の製作場や火を焚いた跡と見られる炭化物のブロックが多数発見されている。今回の調査では、服部台2遺跡で7点の大型石刃核がまとまって出土した。

縄文時代・続縄文時代

富野3遺跡で縄文時代早期の集落跡を調査、包含層から3点の石刃鏃が見つかった。キウス4遺跡A2地区では早期～前期の集落跡を調査、低湿部から割板材、杭などの木製品が出土した。

キウス4遺跡の遺構・遺物のうち大半を占めるのは縄文後期後半のものである。今回、発掘された周堤墓は平成7年度の調査開始から数えて7基目にあたる。周堤の内側に見つかった5つの墓壙のうち、2基からヒスイ製の玉が計8点出土した。周堤墓の西側に続く地区で検出された柱穴群は、ここが多くの竪穴住居が構築された集落跡であることを物語っている。集落跡の南北に広がる盛土遺構の中からは、100万点を越える土器・石器類のほか、土偶や玉類などの装飾品も多数発見された。調査区南端の低湿部では石斧の柄、槌、脚付



平成10年度　調査遺跡の位置

き盆状容器などの木製品が出土している。

平成元年度から調査を続けてきた滝里遺跡群では10遺跡の調査を行い、縄文時代晩期末から続縄文時代初頭の遺構・遺物を発掘した。滝里安井遺跡で発掘した墓からは、鉢形土器と約1,500点の琥珀製平玉とともにクマをかたどった石製品が見つかった。この石製品は蛇紋岩製、全体を磨いて整形したもので、クマの特徴がよく表現されている。

擦文時代～中・近世（アイヌ文化期）

平成８年度から継続調査中のユカンボシＣ15遺跡で住居跡や柵列跡が見つかり、旧ユカンボシ川跡と考えられる低湿部から多くの木製品が出土した。舟材や建材、木槌・竪杵・機織具などの日用品のほか、漆塗の椀・曲げ物など交易品とみられるものも多数ある。

平成元年度から続けてきた滝里遺跡群の調査は、今年度で現地発掘を終了した。来年度には９冊目にあたる最終報告書を作成する予定である。白滝遺跡群の調査はあと数カ所を残しているが、来年度から本格的に整理作業にあたる計画である。キウス４遺跡とユカンボシＣ15遺跡は、今年度で現地発掘を終え、今後数年をかけて整理・報告書作成を進める予定になっている。

平成４～８年度にかけて発掘を行った中野Ｂ遺跡の整理作業は今年度で終了の予定。昨年度までに４冊の報告書を刊行したが、現在、最終年度発掘分についての報告をとりまとめ中である。

平成10年度　調査一覧

遺跡名	所在地	調査面積	原因工事（委託者）	備考
柏台１遺跡	千歳市	3,400㎡	国道337号新千歳空港関連工事（札幌開発建設部）	Ｈ９から継続、調査終了
中野Ｂ遺跡	函館市	－	函館空港拡張整備工事（函館開発建設部）	Ｈ８の整理作業
服部台２遺跡	白滝村	3,812	国道450号白滝道路改良工事（網走開発建設部）	新規
奥白滝１遺跡	白滝村	2,067		Ｈ９から継続、調査終了
上白滝５遺跡	白滝村	4,132		Ｈ９から継続、調査終了
上白滝６遺跡	白滝村	6,953		新規、調査終了
上白滝７遺跡	白滝村	5,150		Ｈ９から継続、調査終了
上白滝８遺跡	白滝村	56		Ｈ７から継続、調査終了
北支湧別４遺跡	白滝村	5,472		新規、調査終了
滝里安井遺跡	芦別市	2,740	石狩川水系滝里ダム建設事業（石狩川開発建設部）	Ｈ８から継続、調査終了
滝里11遺跡	芦別市	3,300		Ｈ４・５調査、調査終了
滝里９遺跡	芦別市	2,400		Ｈ８調査、調査終了
滝里32遺跡	芦別市	2,940		Ｈ３・４調査、調査終了
滝里26遺跡	芦別市	4,400		新規、調査終了
滝里12遺跡	芦別市	4,500		Ｈ９から継続、調査終了
滝里16遺跡	芦別市	4,100		新規、調査終了
滝里17遺跡	芦別市	3,000		新規、調査終了
滝里２遺跡	芦別市	2,300		新規、調査終了
滝里３遺跡	芦別市	2,600		新規、調査終了
富野３遺跡	長万部町	8,500	北海道縦貫自動車道建設事業（日本道路公団）	新規、調査終了
山崎４遺跡	八雲町	3,000		新規
キウス４遺跡	千歳市	18,940	北海道横断自動車道建設事業（日本道路公団）	Ｈ７から継続、調査終了
キウス５遺跡	千歳市	1,648		Ｈ６から継続、調査終了
キウス７遺跡	千歳市	130		Ｈ５から継続、調査終了
ユカンボシＣ15遺跡	千歳市	3,000		Ｈ８から継続、調査終了
ユカンボシＥ７遺跡	恵庭市	－		Ｈ８・９の整理作業
合計	26遺跡4市2町1村	98,540㎡	5省6事業	

2　調査遺跡

柏台1遺跡（A－03－274）

事 業 名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：千歳市柏台1342－10

調査面積：3,400㎡

発掘期間：平成10年5月6日～10月31日

調 査 員：越田賢一郎、立川トマス、福井淳一

調査の概要

柏台1遺跡は千歳市街地の東南約2㎞、支笏軽石流堆積物起源の古砂丘に由来する尾根状の微高地に立地する。平成9年度から2年間でA地区400㎡とB地区5,900㎡の発掘調査を行った。

平成9年度の調査では、恵庭a降下軽石層（En－a）下位の火山灰質シルト層から旧石器時代の遺物が7,000点ほど出土したほか、顔料として使用された可能性のある赤色礫や黒色礫が見つかったこと、En－a直下から樹木痕が検出されたことなどの成果があった。今年度はB地区の残り3,400㎡について調査を実施した。遺物の集中域（ブロック）は、昨年度調査区を合わせると15カ所に分かれており、出土点数は剥片・砕片を含めて約35,000点にのぼる。

遺構と遺物

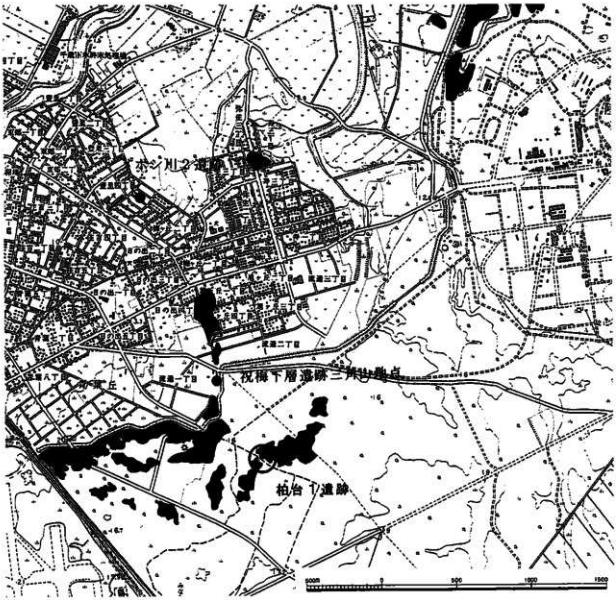
15カ所の遺物集中域のうち13カ所で炉跡と推定される炭化物と焼土を検出した。遺物は、蘭越型細石刃核・細石刃・石刃・彫器・掻器などを含む細石刃石器群と、掻器を主体に削器・石核などで構成される不定形剥片石器群とに区分される。2つの遺物群はそれぞれ独立した集中域を形成しており、様相を異にしている。前者は頁岩が主に利用され、遺物量は数百点ほど、後者は黒曜石・メノウ・安山岩など多種の石材が使われ、出土量は数千点にのぼる。両遺物群ともI層からV層上部にかけての30cmほどの間で出土している。しかし、炉跡の焼土が検出されたIV層下部が本来の包含層であり、その後インボリューションにより擾乱を受けたものと考えられる。またそれぞれの炉跡から検出した木炭片の放射性炭素年代測定により、20,000～22,500年前の値が出ている。

支笏軽石流堆積物層起源の軽石の礫群が9カ所の集中域で出土している。一定の範囲内からまとまって出土したが、風化が激しく使用痕は確認できない。火を受けている例がある。

細石刃石器群からなるブロック15から琥珀玉1点が出土した。推定直径1㎝、厚さ0.6㎝、孔径0.3㎝の平玉で、半分ほどが残存している。この集中域では細石刃関連の遺物がまとまって出土した地点もあったが、掘り込みは確認できなかった。また不定形剥片石器群からなるブロック9から、等間隔に刻みが付けられた礫が出土した。なお赤色礫は今年も数多く出土した。擦り痕の残るもの、火を受けた痕跡のあるもの、破砕されたものなどがある。

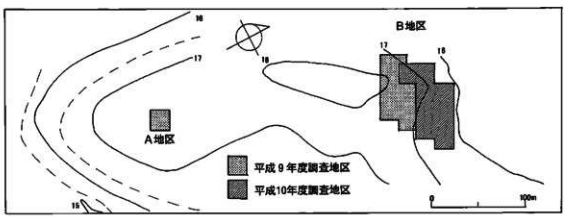
古環境復原について

En－a直下のI層上面からは、昨年に引き続き木根と倒木の痕跡が検出された。木質部は残存していないため樹種の特定は困難である。樹木痕は標高12～13mの肩部から斜面部にかけて多い。高い所や低い所では、小ドーム状の凹凸のある地形（アース・ハンモック）が観察できた。En－a降下直前には、草原と疎林の広がっていた景観が想定される。層位からみると時代は少し古くなるが、旧石器人が生活していた時期にも、同様な景観の広がっていた可能性が強い。また、炉跡から小片であるが動物の焼骨が検出された。この時代の骨が遺跡から出土した例は少ない。

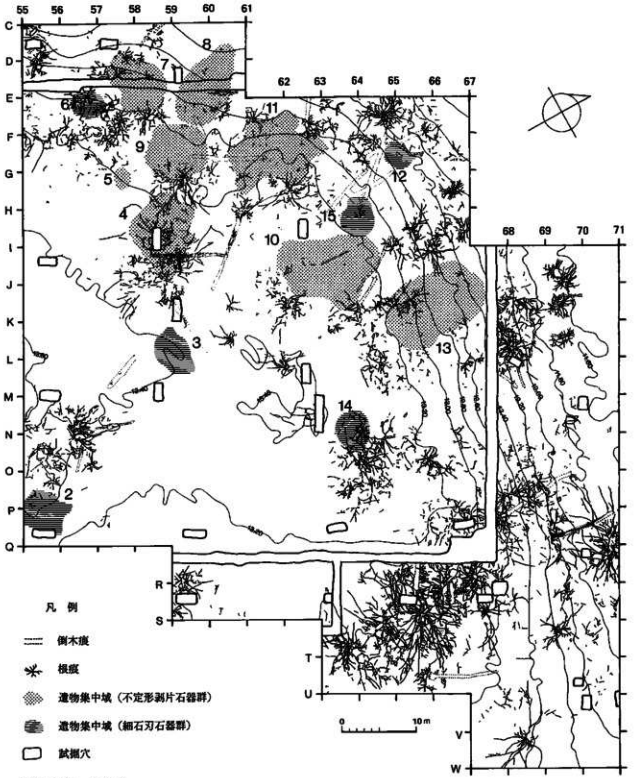


遺跡の位置と古砂丘の分布

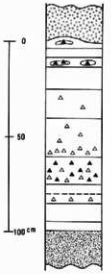
（本図は北海道開拓記念館 1998『馬追丘陵を訪ねて－川・マンモスゾウ、旧石器時代の人を探る－』を参考に作成したものである。）



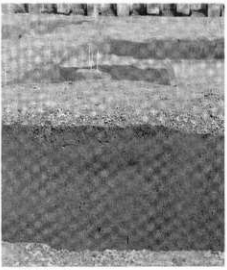
調査地区と周辺の地形



遺物集中域と樹木痕の位置（B地区）

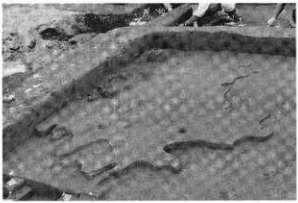


基本土層模式図

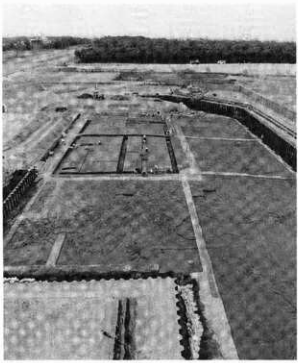


土 層 断 面

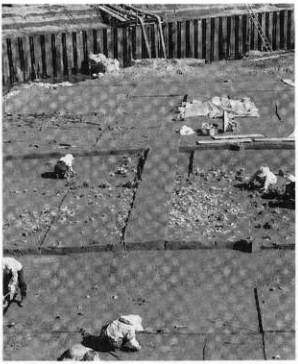
琥 珀 玉



ブロック10炉跡



木根痕と調査状況（東から）



ブロック11遺物出土状況（南から）

中野(なかの)B遺跡（B－01－39）

事 業 名：函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：北海道開発局函館開発建設部
所 在 地：函館市中野町97－1ほか
整理期間：平成10年4月10日～平成11年3月24日
調 査 員：田中哲郎、富永勝也

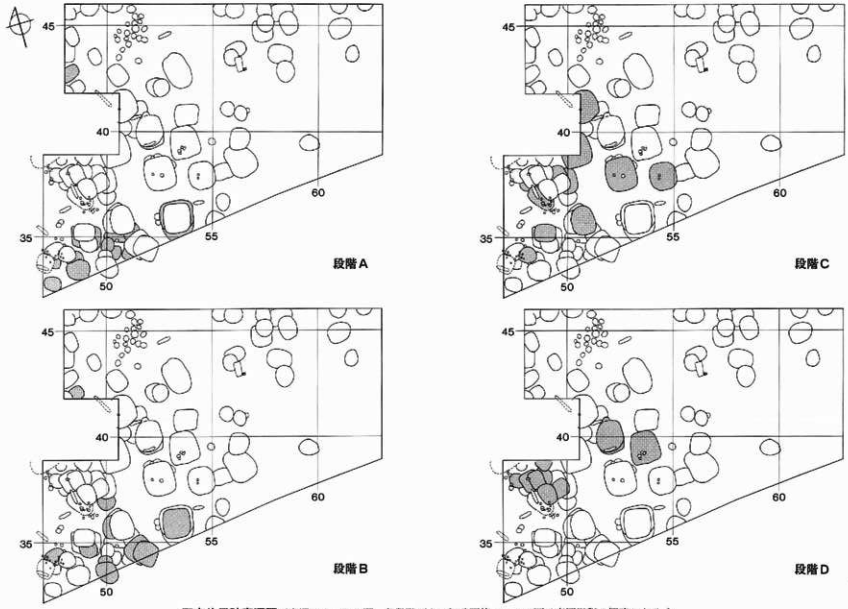
整理作業の概要

昨年度に引き続き平成8年度の調査によって得られた遺物の整理を行った。遺物は縄文時代早期の土器・石器・土製品・石製品・自然遺物等である。土器・石器などの個別遺物の観察のほか、今年度は特に遺物出土位置の確認を行い、接合関係の把握に努めた。このことによって、現場調査での遺構切り合い関係を前提として、竪穴間の前後関係を求めた。ただし、すべての竪穴を、厳密な意味での併存関係をもって把握できたわけではないことを先にお断りしたい。

遺物の接合関係については、まず広範囲に接合関係をもつ土器や、複数の竪穴間で接合関係をもつ土器の所属を問題とした。出土地点が竪穴覆土のどの位置にあり、どのような接合関係をもっているかを考慮した。竪穴覆土の上部、中部、下部、壁際のいずれから出土したのか。また、竪穴中央に向かって流れ込むような接合関係をもつか、水平な接合位置関係をもつかの諸点である。

ここで、竪穴覆土の堆積の成因を考えなければならない。そこには竪穴が廃棄されてから埋没する過程で、その覆土が自然堆積であるのか、人為的な土砂の移動があるのかという点である。前者にはH－565などの大型竪穴のように中央部に後世の自然堆積層（黒色の腐植土層を主とする）が確認され、廃棄後長期間窪んでいたと判断されたものが該当する。後者では、H－562のように覆土下部から上部まで多くの遺物が包含され、人為的な土砂の移動を考えなければならないものがある。また、竪穴中央に自然堆積層がみられず、遺物も包含されない竪穴もみられるなど色々な状況がみられた。人為的土砂の移動には新規竪穴の掘り返しによるものや、整地（竪穴凹地の均平化）によるものが考えられる。そこには遺物が伴う場合と伴わない場合が想定されるが、単純に遺物が伴わない土砂の移動はその地域で古く行われたと考えた。

遺物の移動は、新規竪穴の掘り返しにより上記の両要素が複合する広範囲の移動、竪穴周辺に置き土され再度その竪穴に流入するもの、竪穴廃棄後の壁崩壊による壊された旧竪穴覆土からの流入などが考えられる。また、遺物それ自体の廃棄にも人間活動により幾通りもの状況があることは想像にかたくなく、複雑な様相を呈する。中野B遺跡のような同一型式（細分の可能性はあるが、まだまだ時間的順位を確立するまでには至っていない）の時間幅の中で多くの切り合い関係をもつ遺跡では、この様な複雑さに拍車を掛けることになる。したがって、一つの竪穴の同一覆土に包含されている遺物が必ずしも同一時期のものと断定することはできず、覆土の上下関係で時間的前後関係を判断することはできない。しかし、遺物それ自体の時間的要素を無視するとすれば、同一覆土内に包含されるその瞬間は同じである。このとき、竪穴それ自体の厳密な同時性を把握することはできないとしても、遺物の接合関係から同時期に窪みを残していた竪穴の把握は可能ではないかと考える。そのことにより、直接切り合い関係を持たない竪穴群に共通項を見つけ、前後関係を考えたのが、次頁の図である。一つの接合関係からだけでは、その正否の確率は低くなり、多くの接合関係を求めなければならない。現段階では、復元土器での接合関係のみの把握であり、不十分さは否めないが、時間の許す限り検討を行いたい。また、現在解釈しきれないものも存在する整理状況にある。



竪穴住居跡変遷図（変遷はA～Dの順。各段階ごとに細分可能で、この図は変遷過程の概略である。）

白滝遺跡群

事 業 名：一般国道450号白滝村白滝道路改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：北海道開発局網走開発建設部
調査面積：27,642㎡（7遺跡合計）
発掘期間：平成10年5月6日～10月24日
調 査 員：長沼　孝、越田雅司、宗像公司、坂本尚史、鈴木宏行、直江康雄

調査遺跡一覧

遺　跡　名	所　在　地	調査面積
服部台2遺跡　（Ⅰ－20－13）	紋別郡白滝村字奥白滝18－3	3,812㎡
奥白滝1遺跡　（Ⅰ－20－50）	紋別郡白滝村字上白滝183－5	2,067㎡
上白滝5遺跡　（Ⅰ－20－88）	紋別郡白滝村字上白滝123－3	4,132㎡
上白滝6遺跡　（Ⅰ－20－89）	紋別郡白滝村字上白滝123－3，122－3	6,953㎡
上白滝7遺跡　（Ⅰ－20－90）	紋別郡白滝村字上白滝219－3	5,150㎡
上白滝8遺跡　（Ⅰ－20－91）	紋別郡白滝村字上白滝181－4	56㎡
北支湧別4遺跡（Ⅰ－20－67）	紋別郡白滝村字北支湧別97－1	5,472㎡

調査の概要

今年度調査した7遺跡は、いずれも湧別川右岸の河岸段丘上に位置し、上流側から服部台2・奥白滝1・上白滝8・上白滝5・上白滝6・上白滝7・北支湧別4遺跡の順で分布している。標高は約430～455m、湧別川との比高は約30～45mである。各遺跡とも、基本的な層序は類似しており、Ⅰ層：表土、Ⅱa層：褐色粘質土、Ⅱb層：灰白色粘質土、Ⅱc層：赤褐色砂質土、Ⅲ層：赤褐色砂質土に分層される。遺物はⅠ～Ⅱc層から出土している。遺構は全体で、炭化木片ブロックが3カ所、焼土ブロックが2カ所確認された。7遺跡で出土した遺物の総数は710,848点、大部分は旧石器時代のものであるが、石鏃などの縄文時代の石器も若干含まれている。

1 服部台2　2 奥白滝1　3 上白滝8
4 上白滝2　5 上白滝5　6 上白滝6
7 上白滝7　8 北支湧別4　9 白滝第4地点
10 白滝第30地点　11 幌加沢遺間　12 赤石山
a 八号沢露頭　b 860m峰露頭
c 白土の沢　d あじさいの滝

遺跡、原石山などの位置

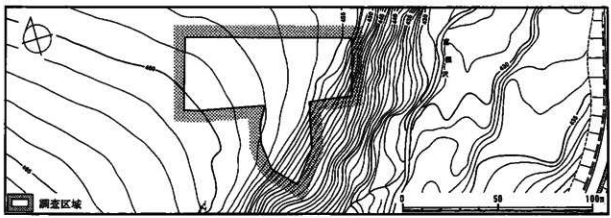
白滝遺跡群遠景（西から）

白滝遺跡群遠景（東から）

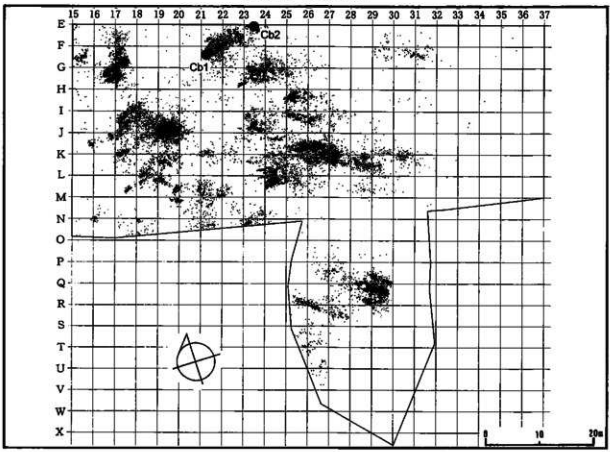
服部台２遺跡の遺構と遺物

遺構は、炭化木片ブロックが２カ所（Cb－1・2）検出されたのみである。

遺物総数は480,164点、うち41,433点の出土位置を計測した。定形的な石器としては、細石刃、細石刃核、舟底形石器、尖頭器、彫器、掻器、削器、錐形石器、石刃、石刃核などがある。遺物は、調査区域南東側の急斜面を除いたほぼ全域で、平面的なまとまり（ブロック）をもって分布している。Ⅰ－23、Ｋ－26、Ｌ－24、Ｑ－28区付近のブロックでは、細石刃核、舟底形石器、石刃核、彫器、掻器がみられた。特にⅠ－23区では、大型の石刃核が７点、0.8×0.3ｍの範囲から多数の剥片を伴って出土した。他のブロックは、木葉形尖頭器を主体とする石器群である。石材の大部分は黒曜石であるが、頁岩製の彫器、石刃などもみられた。



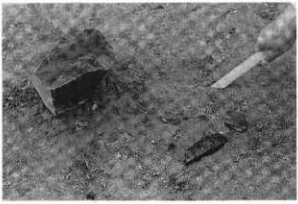
服部台２　調査区域図



服部台２　遺物分布、炭化木片ブロック位置図

服部台２　調査状況（北東から）

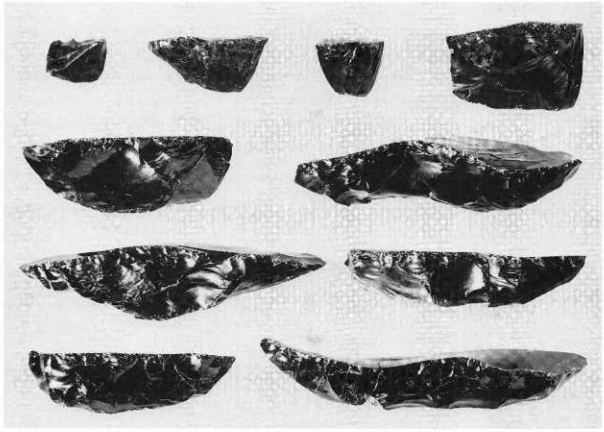
服部台２　Ｋ－23区遺物出土状況



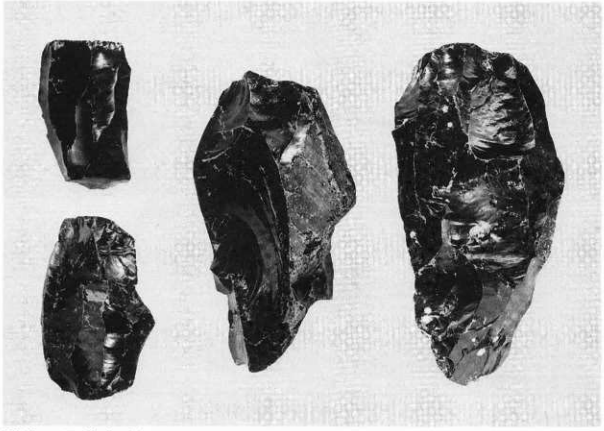
服部台２　Ｋ－23区舟底形石器・石核出土状況

服部台２　Ｉ－23区遺物出土状況

服部台２　Ｉ－23区石刃核出土状況



服部台２　細石刃核・舟底形石器（1／2）

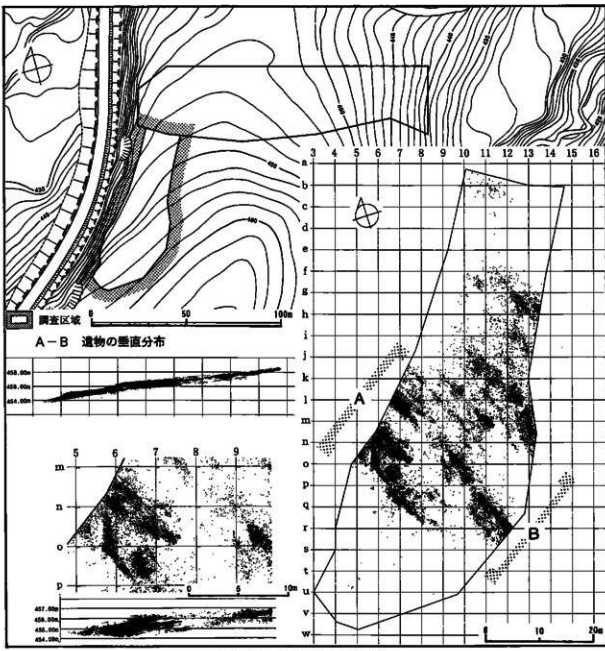


服部台２　石刃核（1／3）

臭白滝１遺跡の遺物

遺物総数は120,238点、うち30,067点の出土位置を計測した。定形的な石器として、尖頭器、彫器、掻器、削器、石刃、石刃核、斧形石器、砥石、敲石などがある。

遺物は、調査区域の中央部に長楕円形のブロックを形成して確認された。それらは、化石周氷河作用の影響をうけ、遺物が斜面方向に沿って移動した結果と考えられる。主要な石器は木葉形の尖頭器で、ブロックによっては、彫器、掻器、石刃、石刃核、斧形石器、砥石、敲石などが共伴している。石材の大部分は黒曜石であるが、頁岩製の彫器、掻器、敲石、剥片、安山岩製の尖頭器、砂岩製の斧形石器、砥石、緑色泥岩の剥片などもみられた。

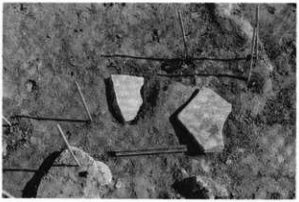


臭白滝１　調査区域、遺物分布図

奥白滝１　調査状況（北東から）

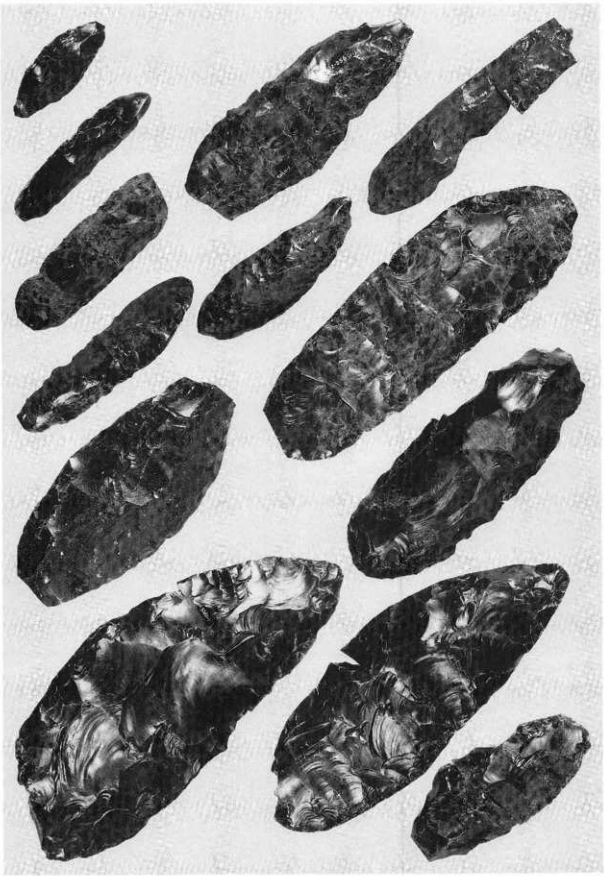
奥白滝１　調査状況（南から）

奥白滝１　Ｏ－６区遺物出土状況



奥白滝１　ｈ－13区砥石出土状況

奥白滝１　ｊ－11区尖頭器出土状況

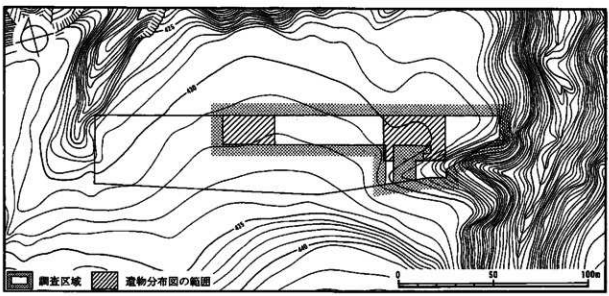


奥白滝1　尖頭器（1／2）

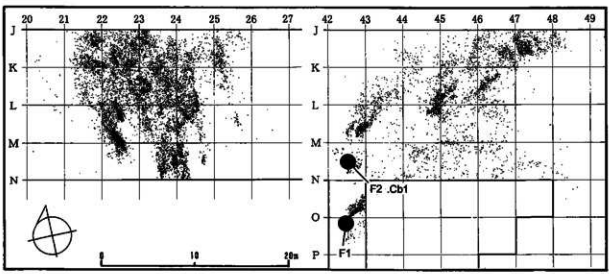
上白滝５遺跡の遺構と遺物

遺構は、炭化木片ブロック１カ所（Cb－１）と焼土ブロック２カ所（F－１・２）が確認された。

遺物総数は68,593点、うち16,687点の出土位置を計測した。定形的な石器としては、尖頭器、舟底形石器、彫器、掻器、削器、斧形石器、石刃、石刃核、石核、石刃鏃などがある。遺物は、調査区域の西側と東側に、それぞれ直径20m程度のブロックを形成して確認された。両ブロックの間では、遺物は出土していない。いずれも木葉形の尖頭器を主体とする石器群で、西側では彫器、掻器、石刃核、東側では舟底形石器、彫器、彫器削片、掻器、削器、石刃核、斧形石器などが共伴している。舟底形石器は、小型で樋状剥離がみられるものが多い。石刃鏃は、調査区域の東端で散発的に確認されたのみである。石材の大部分は黒曜石であるが、東側のブロックでは頁岩製の彫器、石刃、安山岩製の斧形石器などがみられた。



上白滝５　調査区域図

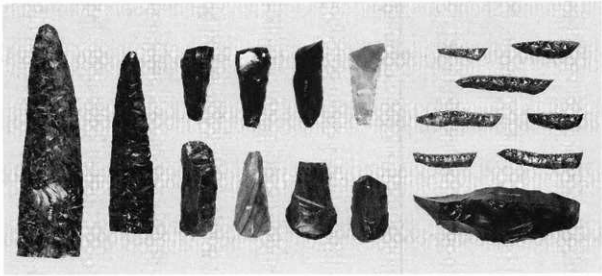


上白滝５　遺物分布、炭化木片・焼土ブロック位置図

上白滝5　調査状況（北西から）

上白滝5　M－42区遺物出土状況

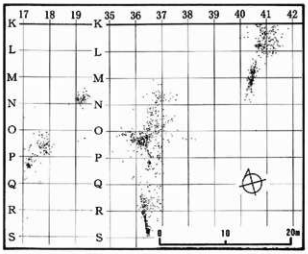
上白滝5　O－42区 F－1検出、尖頭器出土状況



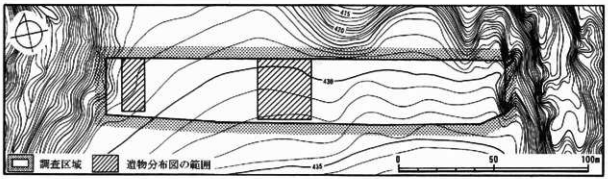
上白滝5　尖頭器、彫器、掻器、舟底形石器（1／2）

上白滝６遺跡の遺物

遺物総数は4,432点、うち1,625点の出土位置を計測した。定形的な石器としては、尖頭器、彫器、掻器、削器、錐形石器、石刃、石核、石刃鏃などがある。遺物は、調査区域の西端と中央部に小規模なブロックを形成して確認された。西側のブロックでは、石刃鏃と掻器が出土した。中央部は黒曜石製の有舌尖頭器を主体とするが、頁岩、砂岩、碧玉など、黒曜石以外の石材を利用した石器の割合が高い。



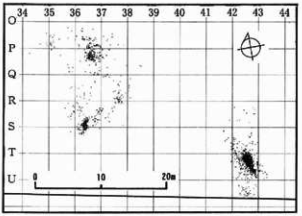
上白滝６　遺物分布図



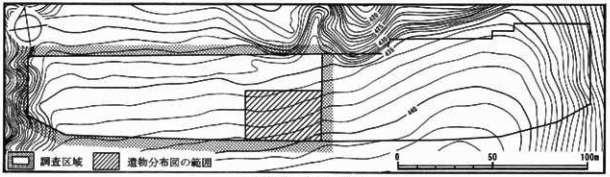
上白滝６　調査区域図

上白滝７遺跡の遺物

遺物総数は12,035点、うち2,095点の位置を計測した。定形的な石器としては、尖頭器、彫器、掻器、石核などがある。遺物は、調査区域の南東端に３カ所の小ブロックで確認された。いずれも剥片素材の木葉形尖頭器を主体とする石器群である。共伴した掻器、削器は、尖頭器製作時の剥片を素材としている。黒曜石以外の石材を利用したものでは、頁岩製の彫器、削器がみられた。



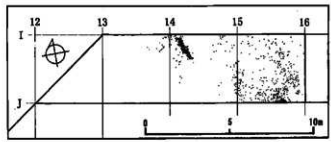
上白滝７　遺物分布図



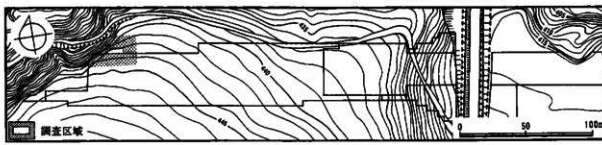
上白滝７　調査区域図

上白滝８遺跡の遺物

遺物総数は3,047点、うち838点の出土位置を計測した。定形的な石器としては、尖頭器、掻器、削器、石刃、石核がある。遺物は主に、調査区域の東半に分布している。



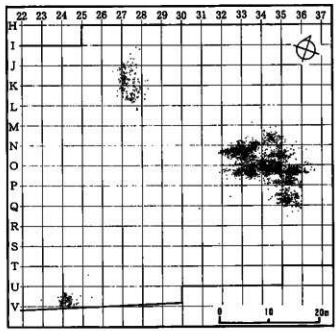
上白滝８　遺物分布図



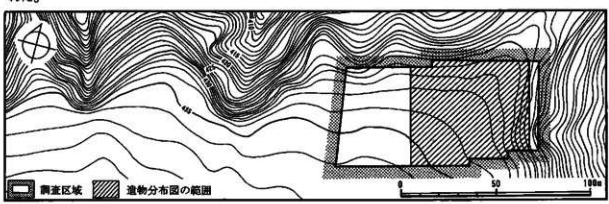
上白滝８　調査区域図

北支湧別４遺跡の遺物

遺物総数は22,339点、うち6,781点の出土位置を計測した。定形的な石器としては、尖頭器、彫器、掻器、削器、石刃、石刃核、石核などがある。遺物は、調査区域の東側に３カ所のブロックを形成して確認された。Ｏ－34区を中心とするブロックは20×10mほどの範囲で、尖頭器を主体とし、彫器、掻器、削器、石刃、石刃核などが共伴している。尖頭器は、木葉形が多いが、有舌尖頭器も含まれる。また、Ｕ－24区の小ブロックでは、加工の粗い小型の尖頭器がみられた。石材の大部分は、黒曜石であるが、めのう製の彫器、頁岩製の尖頭器などがみられた。



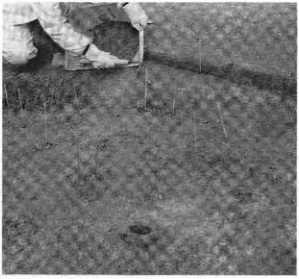
北支湧別４　遺物分布図



北支湧別４　調査区域図

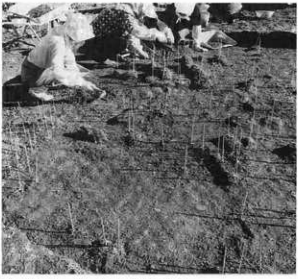
上白滝６　調査状況（北東から）

上白滝７　調査状況（東から）

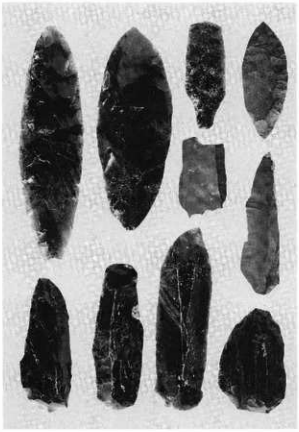


上白滝７　Ｔ－42区遺物出土状況

北支湧別４　調査状況（北西から）

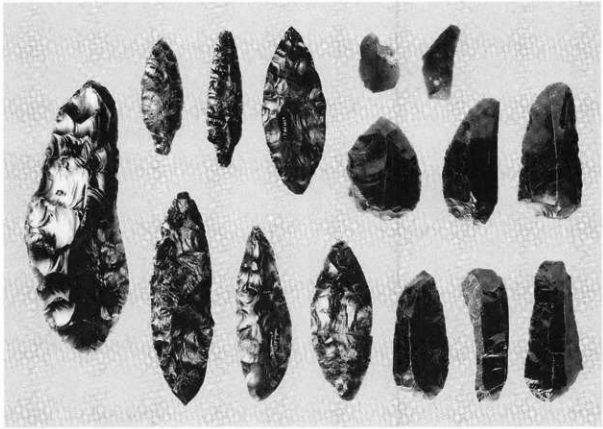


北支湧別４　Ｎ－33区遺物出土状況



上白滝6　尖頭器、錐形石器、彫器、掻器（1／2）

上白滝7　尖頭器、掻器、彫器、尖頭器接合資料（1／2）



北支湧別4　尖頭器、彫器、掻器（1／2）

滝里遺跡群

事 業 名：石狩川水系滝里ダム建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：北海道開発局石狩川開発建設部
調査面積：32,280㎡（10遺跡合計）
発掘期間：平成10年 5月6日～10月27日
調 査 員：遠藤香澄、村田 大、愛場和人、影浦 覚、佐藤 剛、酒井秀治

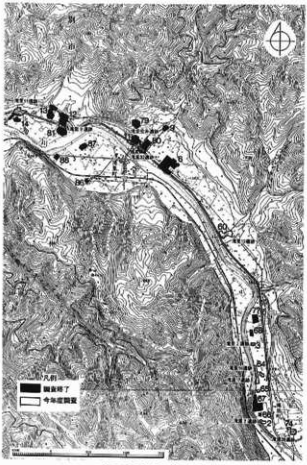
調査遺跡一覧

遺跡名	所在地	調査面積
滝里2遺跡 （E－04－2）	芦別市滝里町477－1ほか	2,300㎡
滝里3遺跡 （E－04－3）	芦別市滝里町406－3	2,600㎡
滝里安井遺跡（E－04－11）	芦別市滝里町313－1地先道路敷地	2,740㎡
滝里9遺跡 （E－04－12）	芦別市滝里町275－5地先道路敷地	2,400㎡
滝里11遺跡 （E－04－14）	芦別市滝里町244－1地先道路敷地	3,300㎡
滝里12遺跡 （E－04－60）	芦別市滝里町369－4ほか	4,500㎡
滝里16遺跡 （E－04－64）	芦別市滝里町422－1ほか地先河川敷	4,100㎡
滝里17遺跡 （E－04－65）	芦別市滝里町449－1ほか地先河川敷	3,000㎡
滝里26遺跡 （E－04－74）	芦別市滝里町490－1ほか	4,400㎡
滝里32遺跡 （E－04－80）	芦別市滝里町322－1地先道路敷地	2,940㎡

調査の概要

滝里遺跡群は芦別市の南東部、空知川の中流域に位置し、調査は滝里ダム建設工事に伴うものである。ダム建設により水没する予定地内には、発掘調査及び遺構確認調査の必要な遺跡は24カ所ある（芦別市域22カ所、富良野市域2カ所）。これらの遺跡を『滝里遺跡群』と総称し平成元年度から継続して調査を進めていたが、今年度をもって現地調査を終了した。10カ年にわたり調査した22遺跡の発掘面積は合計190,382㎡、出土した遺物は90万点にのぼる。

今年度調査した遺跡はいずれも空知川右岸にあり、河川に沿った低地や自然堤防上、また支流によって形成された沖積錐上に立地している。旧国道38号線の敷地の4カ所、ペンケテシマナイ川と奈江川の間にある5カ所、滝里12遺跡の下層の計10カ所である。このうち滝里11遺跡が『滝里遺跡群』の中で最も下流部に、滝里26遺跡が最も上流部に位置している。当初計画の発掘面積は31,550㎡であったが滝里11遺跡、滝里安井遺跡、滝里32遺跡において変更があり最終的には730㎡の増加となった。



滝里遺跡群の位置図

旧国道下の４カ所（下流側から滝里11・滝里９・滝里安井・滝里32遺跡）については平成４～９年度の調査区に続くものである。滝里11遺跡では調査区のごく狭い範囲から縄文時代晩期末から続縄文時代初頭にかけての遺構・遺物が多数検出されている。続縄文初頭とみられる竪穴住居跡が１軒検出されているが、平面形は不整な隅丸方形を呈し南東に張り出しをもつものである。この時期の住居跡は滝里遺跡群では初めての例である。26基確認できた土壙はその半数が墓壙の可能性がある。滝里安井遺跡は３カ年にわたる調査で土壙、石囲い炉、焼土等の多数の遺構と20万点を超える遺物が出土している。その主体は縄文晩期末葉頃ではあるが、縄文前期をはじめとして各時期の資料が検出されており、人々が連綿と生活していたことが伺われる。今年度は墓壙３基を含め10基の土壙が検出された。Ｐ－45からは1,500点ほどの琥珀製平玉、小型の鉢形土器とともに蛇紋岩製の『クマ形石製品』が出土した。後肢の直前に貫通孔があるもので全体を磨きで整形し、全身を写実的に表現しているものである。

滝里12遺跡は平成９年度に上層（縄文中期から続縄文時代初頭の包含層）の調査を終了しており、今年度は下層（Ⅴ層）の調査を行った。土壙、焼土とともに早期の中茶路式、東釧路Ⅳ式、前期の綱文式土器が出土した。

滝里26遺跡では縄文晩期末から続縄文初頭頃の土壙が８基検出された。壙底に赤色顔料が多量に撒かれたもの、石鏃、石斧と琥珀製平玉を副葬させるものなど墓壙とみられるものがある。

このほかごく少数であるが縄文時代早期中葉の貝殻文、条痕文、沈線文平底土器の資料が滝里16遺跡と滝里26遺跡で追加された。

滝里安井遺跡（Ｅ－04－11）

所 在 地：芦別市滝里町313－１地先道路敷地

調査面積：2,740㎡

遺跡の概要

滝里安井遺跡は標高133～140ｍの低位の段丘上に立地する。遺跡東側には空知川の支流であるポンルペシュペ川が流れ、沖積錐を形成している。本遺跡の調査は平成８・９年度に引き続き３年目で、今年度は遺跡南西部にあたる旧国道38号線下を調査した。土層はⅠ層：撹乱土・耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：黄褐色砂質土・青灰色粘質土で、このうち主たる遺物包含層はⅡ層である。旧国道下は１ｍ以上の盛土がなされ、その下は黄褐色土層まで削平されていた。国道本線部より南側は急斜面となっており、黒色土が良好に残っていたため240㎡拡張して調査を行った。

遺構と遺物

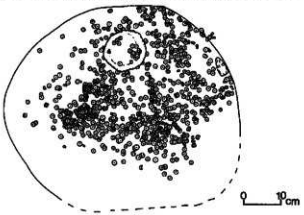
３年間の調査で遺構は土壙47基、石囲い炉７基、集石８カ所、焼土51カ所が検出された。

今年度検出の遺構は、土壙10基、集石２カ所、焼土１カ所である。土壙はすべて標高134ｍの段丘縁辺部で検出された。時期はいずれも縄文時代晩期末～続縄文時代初頭と考えられ、このうち３基（Ｐ－42・44・45）については土壙墓の可能性が高い。

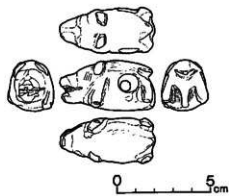
Ｐ－45は平面形が円形、直径60㎝ほどの土壙である。確認面からの深さは25㎝ほどで、土壙の断面形はフラスコ状となる。出土した遺物はクマ形の石製品、完形の鉢形土器、琥珀製平玉などである。クマ形石製品は北東の壁際から出土した。蛇紋岩製で、大きさは長径5.1㎝、高さ2.6㎝、幅2.4㎝である。全体を磨いて整形し、四肢や耳部、尾部を削り出している。胴部には直径５㎜の穴が両側からあけられており、後肢側には紐擦れ痕が認められる。土器は器高６㎝、口径11㎝の小型のもので、口縁部には縄線が２条巡る。底部と底面には縄端による刺突が巡る。琥珀製平玉は、そのほとんどが底面

および底面直上で検出された。一部は連になっていたが、多くは土壙中心部から北東部にかけて散布されたような状態であった。またクマ形石製品が出土した北東側の壁からもまとまって検出されている。平玉の直径はほとんどが10㎜弱で、これまで滝里遺跡群でみられたものと比べて大振りである。

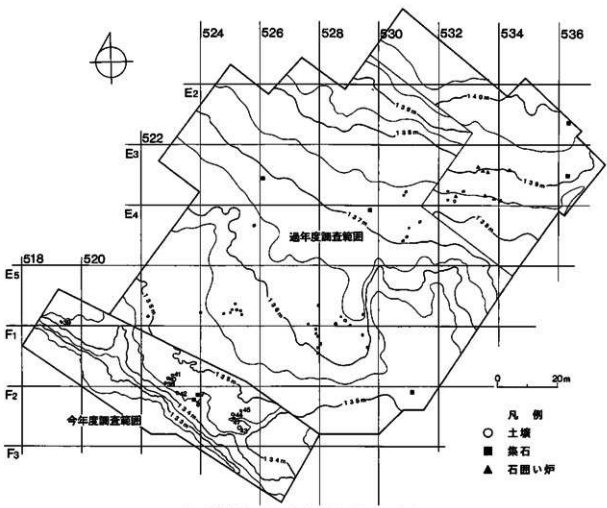
3年間の調査では20万点を超える遺物が出土している。今年度の調査では約11,600点の遺物が出土した。土器は約6,100点。縄文時代晩期末から続縄文時代初頭のものが多く、縄文時代中期の土器が若干みられる。石器等は約4,000点、礫石器は非常に少ない。琥珀製平玉は約1,500点である。



P－45遺物出土状況

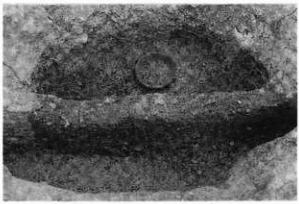


P－45出土のクマ形石製品

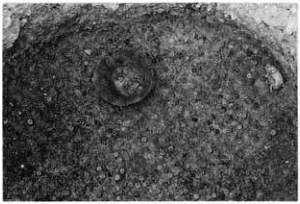


滝里安井遺跡　遺構位置図（等高線は最終面）

滝里安井　調査状況（西から）

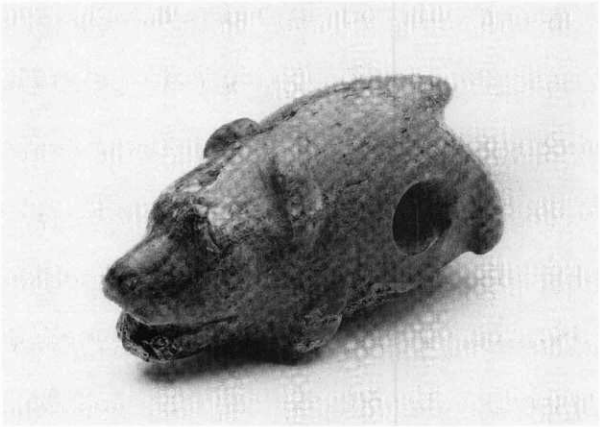


滝里安井　P－45土層断面（南から）



滝里安井　P－45遺物出土状況

滝里安井　P－45完掘（西から）



滝里安井　P－45出土のクマ形石製品

滝里11遺跡（E－04－14）

所 在 地：芦別市滝里町244－１地先道路敷地

調査面積：3,300㎡

遺跡の概要

遺跡は空知川右岸の標高130～135ｍの南面した緩斜面上に立地する。空知川流域に連なる滝里遺跡群の中では最下流にある遺跡である。平成３・４年度に一部の調査をおこなったが、今回は、それに続く旧国道下を発掘した。地形は沖積錐の末端部にあたり、基本土層は上位からⅠ層：表土・撹乱土、Ⅱ層：暗褐色土、Ⅲ層：灰褐色砂利層、Ⅳ層：黄色砂利層に区分できる。遺物包含層はⅡ・Ⅲ層であり、遺構はⅣ層中で確認された。

トレンチ調査で遺物包含層の堆積状況を把握したが、B_2－370・372区を除いては水田造成などで削平されていたため、重機併用による遺構確認調査範囲とした。手掘り調査範囲としたB_2－370区とその周辺からは土壙や焼土、石囲い炉がまとまって検出された。また、調査区北側では続縄文時代初頭の住居跡も１軒確認された。当該期の住居跡は滝里遺跡群で初めての例である。手掘り調査の結果、包含層が北側へ広がることが判明、300㎡を拡張して調査面積は最終的に3,300㎡となった。

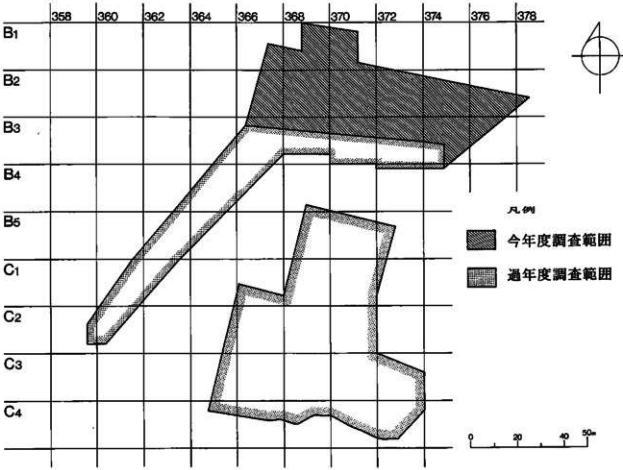
遺構と遺物

検出した遺構は住居跡１軒、土壙26基、石囲い炉６基、焼土18カ所、小柱穴７基である。他にフレイク・チップの集中地点が１カ所確認された。出土遺物が縄文時代晩期末から続縄文時代初頭のものに限られていることから、遺構もすべてこれらの時期に属すると思われる。遺構の中でも掘り込みのあるものは、覆土内の黒土が壁から砂利層中へ浸透していたため、輪郭の確認が非常に困難であった。

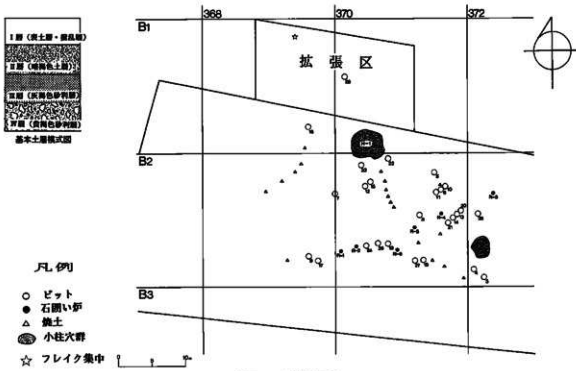
住居跡は長軸約4.8ｍ、短軸約3.6ｍの不整隅丸方形の竪穴で、南東部が張り出し状になっている。壁は緩やかに立上がるが、南側ははっきりしなかった。住居を斜面上に構築したため片切り状に壁が開いていたためと思われる。あるいは土を盛って南側の壁としたのかもしれない。床はⅣ層中に作られ、平坦である。焼土は覆土中と床面の２カ所で確認された。床面の焼土は覆土中のものに比べると薄いが、周囲に焼けた礫が散乱して出土していることから炉の可能性がある。柱跡とみられる径６～８㎝の柱穴は、住居内外から10カ所検出された。外側のものは壁沿いに等間隔で確認されたが、住居内の柱穴には規則性がみられず、主柱穴と判断されるものはない。

土壙26基のうち、形態・規模・覆土の状態から墓の可能性があるものは半数以上にのぼる。これらの土壙からは多くの遺物が出土したが、覆土上部に散発的に出土したものが大半であり、壙底面でまとまって出土したものは少ない。覆土上部から多量の焼骨片や剥片石器が出土したが、壙底部からまったく遺物が出土していない遺構（Ｐ－７）もある。ある程度まで土を埋め戻した段階で、あらためて遺物を埋納した可能性が想定される。

今年度の包含層出土遺物は、概数で土器片32,000点、石器類70,000点、総数102,000点である。石器は3,800点が出土した。剥片石器が3,600点、礫石器が200点であるが、器種には極端な偏りがある。とくに二等辺三角形の石鏃とナイフ・スクレイパー類、礫石器ではスコリア製の砥石が多く出土している。反面、すり石や石皿はほとんど出土していない。また遺構に伴うものではないが、珍しい遺物としてクルミを模したと思われる土製品や、滝里の縄文人が野花南（のかない）など付近の渓谷から運んできたと考えられるアンモナイトも出土している。



滝里11　調査区域図



滝里11　遺構位置図

調査前全景（西から）

調査状況（北から－正面奥にダム）

クルミ様土製品出土状況（東から）

アンモナイト出土状況（南から）

石囲い炉検出状況（西から）

P－23　完掘（西から）

H－1　調査状況（北から）

H－1　完掘（北から）

滝里９遺跡（Ｅ－04－12）

所 在 地：芦別市滝里町275－５地先道路敷地

調査面積：2,400㎡

調査の概要

空知川右岸の低位段丘上に立地する。今年度の調査区は旧国道38号線下で、斜面下側には滝里33遺跡がある。国道造成工事により、遺跡南東部以外はほとんどが削平されていた。土層はⅠ層：攪乱土、耕作土、Ⅱ層：黒色土、黒褐色土、Ⅲ層：黄褐色粘質土に区分され、主たる遺物包含層はⅡ層である。

遺構はＴピット１基、集石１カ所、焼土２カ所である。遺物は土器約3,650点、石器等約5,200点である。土器はほとんどが縄文時代晩期末のもので、少量ではあるが縄文時代前期、後期の土器もみられる。

滝里32遺跡（Ｅ－04－80）

所 在 地：芦別市滝里町322－１地先道路敷地

調査面積：2,940㎡

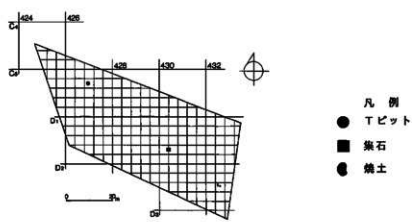
遺跡の概要

空知川右岸の低位の段丘上に立地する。ポンルペシュペ川を挟んで西側には滝里安井遺跡がある。

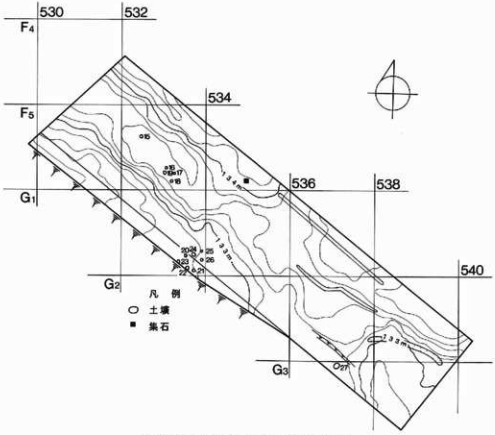
土層はⅠ層：攪乱土、耕作土、Ⅱ層：褐色砂質土、Ⅲ層：黒褐色土、Ⅳ層：黄褐色粘質土と黄褐色砂礫層の互層に区分され、主たる遺物包含層はⅢ層である。調査区は国道造成により広い範囲で削平されていたが、南西部斜面に包含層が残っていたため190㎡拡張して調査した。

遺構と遺物

遺構は土壙13基、石囲い炉１基、集石１カ所である。Ｐ－27を除いた土壙12基は、標高132～134ｍにかけての段丘上に２カ所に分かれて検出された。これらの土壙の平面形は直径１ｍ未満の円形で、壁は垂直もしくはややオーバーハングするものが多い。出土した遺物はいずれも礫が主体で、このほかに少量の土器片、フレイクが伴う。これらの土壙は縄文時代晩期のものと思われる。Ｐ－27は長軸1.5ｍ、短軸1.3ｍの不整の楕円形を呈する。確認面からは礫がまとまって検出され、覆土中からは土器片、スクレイパー、砥石などが散布された状態で出土した。縄文時代中期モコト式の時期の土壙と考えられる。遺物は土器約9,200点、石器等5,300点である。土器は縄文時代晩期末が主体である。



滝里９　遺構位置図



滝里32　遺構位置図（等高線は最終面）

滝里32　調査状況（東から）

滝里32　P－22礫出土状況

滝里32　P－24礫出土状況

滝里32　P－25礫出土状況

滝里26遺跡（E－04－74）

所 在 地：芦別市滝里町490－1ほか

調査面積：4,400㎡

遺跡の概要

滝里26遺跡は、空知川の支流である奈江川右岸の沖積錐上に立地し、標高は約150mである。滝里遺跡群の中では最上流に位置する。調査前には水田、宅地等として利用されていた。遺跡は西地区と東地区に分かれており、西地区の1,300㎡は遺構確認調査区である。

土層は、上位からⅠ層：表土・耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：黄褐色砂質土（河川堆積物の礫と砂の互層）に区分される。Ⅱ層は旧河道跡では細分が可能な場所もある。このうち、主たる遺物包含層はⅡ層で、縄文時代早期と縄文時代中期から続縄文時代初頭の遺構・遺物が検出されている。

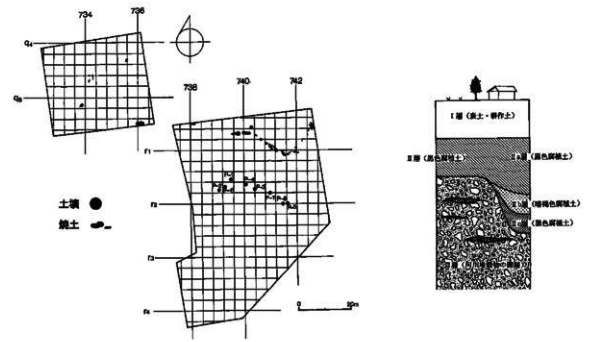
調査は、東地区の包含層の残存状況を確認するため、調査区全体にトレンチ調査を実施した。その結果、宅地跡等の攪乱が激しく、包含層は一部にしか残存していなかった。また、旧河道跡から焼土群が検出され、一部は西地区に続くことが予想された。このため西地区は水田の客土のみを重機で除去し、人力で調査を行うこととした。

遺構と遺物

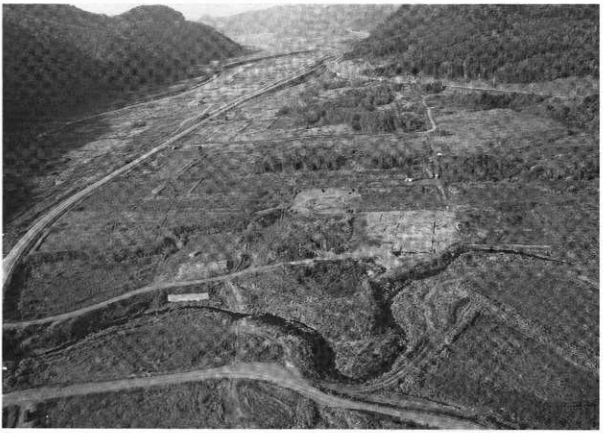
検出した遺構は土壙8基と旧河道跡の焼土群である。

土壙はすべて、縄文時代晩期末から続縄文時代初頭のものと思われる。土壙墓と考えられるP－8の壙底には赤色顔料が多量に撒かれ、石鏃や石斧のほか約1,700点の琥珀玉など副葬品が非常に豊富であった。また、P－6は覆土中に厚い焼土が形成され、その上面から遺物が出土した。河道跡から検出された焼土群は、一部を除き二次堆積の焼土である。

遺物は土器が約7,000点で、縄文時代晩期末から続縄文時代初頭のものが最も多く、このほかに縄文時代早期の条痕文・沈線文平底土器、中期の北筒式、後期の余市式のものも少量みられる。ほかには、石器約500点、フレイク・チップ約10,000点、琥珀製の玉類等が約1,700点の計19,200点である。



滝里26 遺構位置図（左）、基本土層模式図（右）



滝里26　遺跡遠景（南から）

滝里26　P－2遺物出土状況（南から）

滝里26　P－6遺物出土状況（東から）

滝里26　P－8琥珀玉出土状況

滝里26　P－8完掘（南から）

滝里12遺跡（Ｅ－04－60）

所 在 地：芦別市滝里町369－４ほか　　調査面積：4,500㎡

調査の概要

遺跡は、空知川の支流であるパンケテシマナイ川右岸の沖積錐上に立地している。標高は約141～143ｍである。土層は上位からⅠ層：表土・耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：河川堆積物の礫層、Ⅴ層：茶褐色土、Ⅵ層：漸移層、Ⅶ層：河川堆積物の礫層に区分される。遺物包含層はⅡ・Ⅴ層である。Ⅱ層は縄文時代晩期から続縄文時代の遺物を含み、昨年度調査を終了している。今年度は調査区東側のⅤ層の調査を行なった。その結果、縄文時代早期後葉から前期前葉の遺構・遺物が検出されている。

遺構は土壙１基、焼土29カ所が検出された。焼土は泥地形の南側に分布する。遺物は東釧路Ⅳ式を主体として中茶路式・綱文式を含む土器が1,169点、石器等が425点、計1,594点出土した。

滝里16遺跡・滝里17遺跡（Ｅ－04－64・65）

滝里16遺跡所在地：芦別市滝里町422－１ほか地先河川敷　　調査面積：4,100㎡

滝里17遺跡所在地：芦別市滝里町449－１ほか地先河川敷　　調査面積：3,000㎡

調査の概要

滝里16・17遺跡は空知川の右岸、標高143～146ｍの河岸段丘上に立地している。両遺跡は用水路を挟んではいるが、地形としては連続している。土層はⅠ層：表土・耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：茶褐色砂質土、Ⅳ層：河川堆積物の礫層に区分される。このうち包含層はⅡ層である。水田造成のためにかなりの部分が削平されていたが、滝里16遺跡の調査区南側の２本の沢の落ち込み、滝里17遺跡の沢の落ち込みに包含層が残っており、縄文時代中期から後期を主体とした遺構・遺物が検出されている。

滝里16遺跡で土壙１基、焼土３カ所が検出されている。土壙からは縄文時代中期後葉の土器が２個体出土している。出土遺物は、土器598点、石器等1,860点の計2,458点である。

滝里17遺跡では焼土が１カ所検出されている。遺物は土器803点、石器等3,092点の計3,895点が出土している。

滝里２遺跡（Ｅ－04－２）

所 在 地：芦別市滝里町477－１ほか　　調査面積：2,300㎡

調査の概要

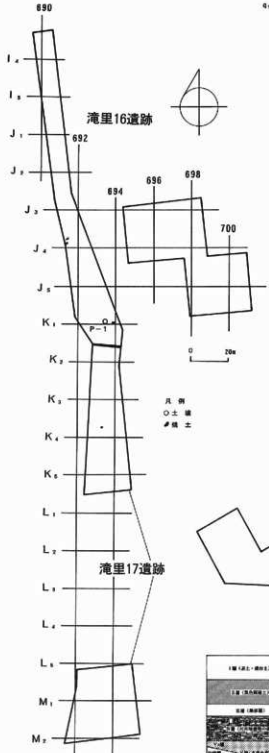
遺跡は空知川右岸、標高145～147ｍの河岸段丘上に立地している。調査区は水田造成のため削平されていた。遺構確認調査を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

滝里３遺跡（Ｅ－04－３）

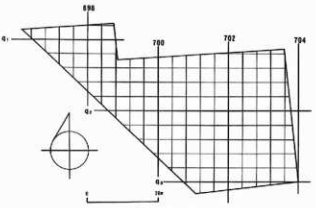
所 在 地：芦別市滝里町406－３　　調査面積：2,600㎡

調査の概要

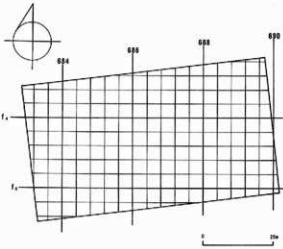
遺跡は空知川右岸、標高143～144ｍの河岸段丘上に立地している。調査区は大部分が水田造成によって削平されており、包含層がわずかに残るのみである。遺構確認調査を行ったが、遺構は検出されなかった。出土遺物は土器２点、石器等９点の計11点である。



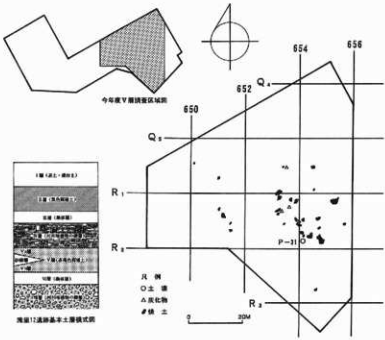
滝里16・17　遺構位置図



滝里2　調査区域図

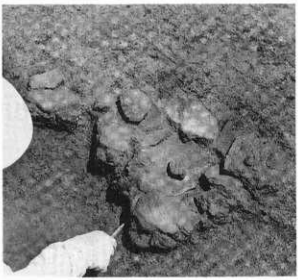


滝里3　調査区域図



滝里12　遺構位置図

滝里12　遺物出土状況



滝里12　遺物出土状況

滝里12　調査状況（南東から）

滝里16　P－1遺物出土状況

滝里16・17　遺跡遠景（南西から）

滝里3　遺跡遠景（北から）

富野3遺跡（B－17－36）

事業名：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：山越郡長万部町字富野129ほか

調査面積：8,500㎡

発掘期間：平成10年5月6日～10月28日

調査員：佐藤和雄、沓川洋一、柚岡淳子、広田良成、立田　理

遺跡の概要

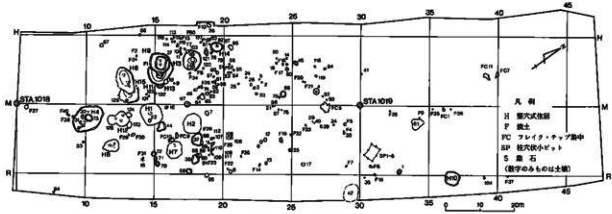
遺跡は海岸から1.3kmほど内陸に入った河岸段丘の南西向き斜面に立地し、標高は25～27mである。調査範囲は段丘縁辺に沿って南西～北東方向に伸びている。調査の結果、縄文時代早期中葉の時期を主体とする多数の遺構・遺物が出土した。土層はⅠ～Ⅶ層に分層され、主な包含層はⅤ・Ⅵ層である。火山灰は白頭山苫小牧火山灰、駒ヶ岳火山灰d層、同g層、クッタラ火山灰等が確認されている。

遺構と遺物

検出された遺構は、竪穴住居跡15軒、土壙127基、柱穴状小ピット8基、焼土44カ所、フレイク・チップ集中11カ所である。竪穴住居はすべて縄文時代早期のもので、物見台式土器の時期に相当するもの2軒、東釧路Ⅱ式土器相当が12軒である。土壙は早・晩期のものが主体で、早期は土壙墓1基、フラスコ状ピット2基、晩期は大洞C$_1$式の時期の土壙が一定の区域で50基確認されている。

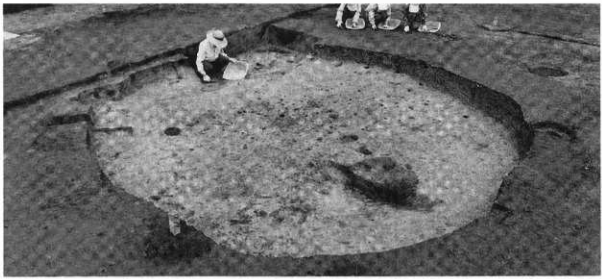
遺物は縄文時代早・中～晩期の遺物が約6万点出土した。土器は早期のものが主体となる。物見台式～鳴川式や東釧路Ⅱ式相当もしくはそれに併行するもので、特に後者は尖底の土器を伴って出土している。また、東釧路Ⅲ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式土器なども少量出土した。この他、中期は円筒土器上層式、後期は涌元式、大津式、手稲式、晩期は土壙内から大洞C$_1$式の土器が出土しているが、いずれも全体に占める割合は少ない。石器類は石鏃（石刃鏃3点を含む）、ポイント、ドリル、つまみ付きナイフ、スクレイパー、トランシェ様石器、石斧、たたき石、すり石、砥石、石錘、石皿などが出土している。この中で石刃鏃は、近隣の栄原2遺跡のものも含めて道内最南端に分布する一群となる。また、石器群の中には旧石器の可能性がある黒曜石製の石刃なども見られる。

遺跡の位置



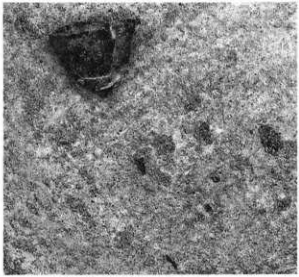
遺構位置図

調査状況（南西から）



H－5　完掘（南から）

H－15　床面遺物出土状況（南西から）



P－1　壙底遺物出土状況（南西から）

山崎4遺跡（B－16－60）

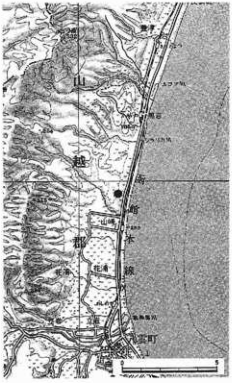
事 業 名：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：日本道路公団北海道支社
所 在 地：山越郡八雲町字山崎213－3ほか
調査面積：3,000㎡
発掘期間：平成10年9月1日～10月28日
調 査 員：佐藤和雄、袖岡淳子、広田良成

遺跡の概要

遺跡は八雲町の市街地から北へ約8㎞、国道5号線西側の内浦湾を望む標高35～41ｍの海岸段丘上に位置する。南側約400ｍの地点には、昭和54年度に八雲町教育委員会によって調査が行われた山崎1遺跡があり、縄文時代早期～中期の遺構・遺物が出土している。

今年度の調査は、調査予定面積16,000㎡のうち、カルバート予定地3,000㎡を対象とした。調査区は3カ所に分かれ、北側からA～C地区と呼称した。A地区は遺構確認調査区である。B・C地区はともに遺物包含層がわずかに残るのみである。なお、調査は来年度も継続して行う予定である。

基本土層は、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：駒ヶ岳火山灰d層（Ko－d）、Ⅲ層：腐植土、Ⅳ層：漸移層、Ⅴ層：黄褐色ロームに区分される。このうちⅢ層が遺物包含層である。

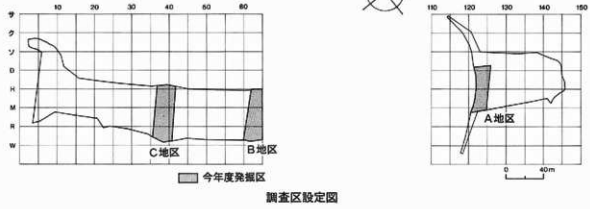


遺跡の位置

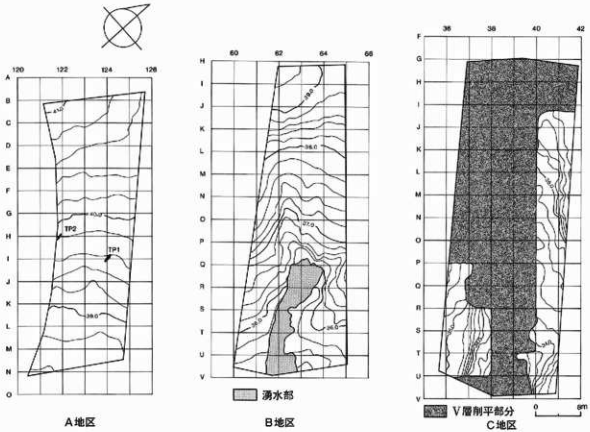
遺構と遺物

遺構はA地区でTピットが2基検出されたのみである。Tピットは2基とも平面形が細い溝状のものである。

遺物はB、C地区の遺物包含層から縄文時代前期～後期の土器・石器が計約12,700点出土した。土器は縄文時代前期の円筒上層下層式、中期の円筒土器上層式、後期の大津式、手稲式等がある。石器には、石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー等がある。

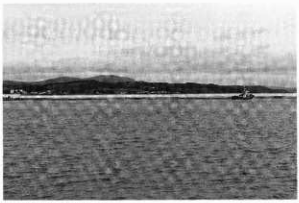


調査区設定図



A地区　　B地区　　C地区

遺構位置図



遺跡遠景（南から）

A地区　完掘（北西から）

B地区　調査状況（南東から）

C地区　遺物出土状況

キウス４遺跡Ｇ・Ｊ１・Ｊ３～Ｊ６地区（Ａ－03－92）

事 業 名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

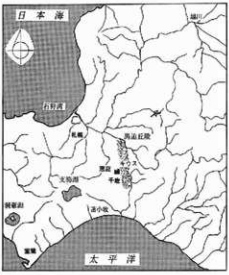
委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：千歳（ちとせ）市中央208－12ほか

調査面積：7,210㎡

発掘期間：平成10年５月６日～10月28日

調 査 員：高橋和樹、土肥研晶、中山昭大、新家水奈、芝田直人、石井淳平



遺跡の位置

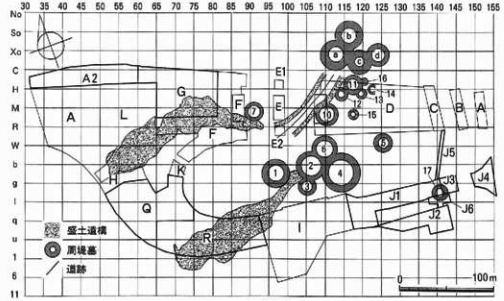
遺跡の概要

キウス４遺跡は千歳市街から北東へ約８km、馬追（まおい）丘陵の西側緩斜面、標高４～19mに位置する。遺構と遺物は縄文時代後期後葉を主体とするもので、北東約300ｍには同時期の国指定史跡「キウス周堤墓群」がある。

平成５年度の詳細試掘調査を皮切りに、平成７年度は橋台・橋脚予定地６カ所、８年度はインターボックス予定地、９年度は本線とインターチェンジ予定地８カ所を調査した。

平成10年度は本線、インターチェンジ、調整池部分など10地区（Ａ２・Ｇ・Ｊ１～６・Ｑ・Ｒ）、合計18,940㎡を調査した。その結果、南側盛土がさらに南の低地部分まで広がることが確認され、縄文時代後期の遺物が大量に出土した。また、南北の盛土遺構に挟まれた地域の柱穴群の分布がより明確になったほか、新たに周堤墓１基が検出された。北西の低湿部では縄文時代前期の木製品が出土している。

遺跡の基本層序は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：樽前ａ降下軽石層、Ⅲ層：黒色土、Ⅳ層：樽前ｃ降下軽石層、Ⅴ層：黒色土、Ⅵ層：漸移層、Ⅶ層：黄褐色ローム、Ⅷ層：恵庭ａ降下軽石層である。盛土遺構・周堤墓を挟むⅤ層については、その上下でⅤａ・Ⅴｂ層に分層した。



キウス４遺跡全体図

G地区

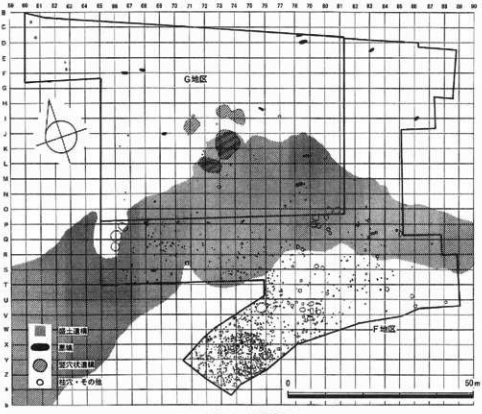
G地区（3,690㎡）は、東から西へ傾斜する台地上に位置し、西側では低湿地に向かって徐々に勾配を増している。昨年度調査したF地区の北側に隣接している。遺構は盛土遺構、焼土1,627カ所、墓壙8基、柱穴25基、竪穴状遺構6基を検出した。遺物の総数は約61万点で、そのうち約47万点が盛土遺構から出土している。縄文時代早期・中期・後期、擦文期のものがあるが、後期後葉の堂林式に相当する時期のものが最も多い。

盛土遺構は、昨年度まで調査されてきた北側盛土の一部である。上部は耕作により削平されており、現状で約50cmの厚みをもつ。大きく分けて上層にはⅥ・Ⅶ層起源の黄褐色土、下層にはⅤ層起源の暗褐色土が堆積している。遺物は土器が大部分を占め、ほぼ全て堂林式に属する。多くは細かく割れた状態で出土した。また、朱塗りの土器片、土偶の頭部・脚部、動物形土製品、ミニチュア土器・石器、スタンプ形土製品、ヒスイ製の玉、アスファルトの付着した礫、異形石器なども出土している。

遺構の大半は盛土下から検出された。焼土群は盛土遺構と重なるように分布し、ほとんどがその場で形成されたものである。墓壙は楕円形または長楕円形である。このうちP－1168からは人骨が出土した。顔面を北へ向けた横臥伸展葬で、頭位は西向きである。竪穴状遺構はほぼ楕円形のプラン、浅い皿状の断面を有するが、立ち上がりは明確ではない。そのうち1基は土器囲い炉をもつ。炉に用いられた土器は後期前葉のタプコプ式に相当するもので、他の竪穴状遺構もこの時期のものと考えられる。

J1・J3～J6地区

J1・J3～J6地区（3,520㎡）は、昨年度調査したI地区の東側に隣接する。J3～J5地区

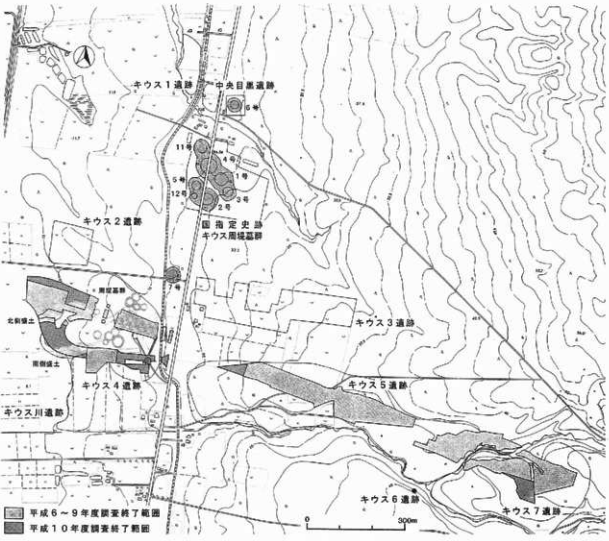


F・G地区　遺構位置図

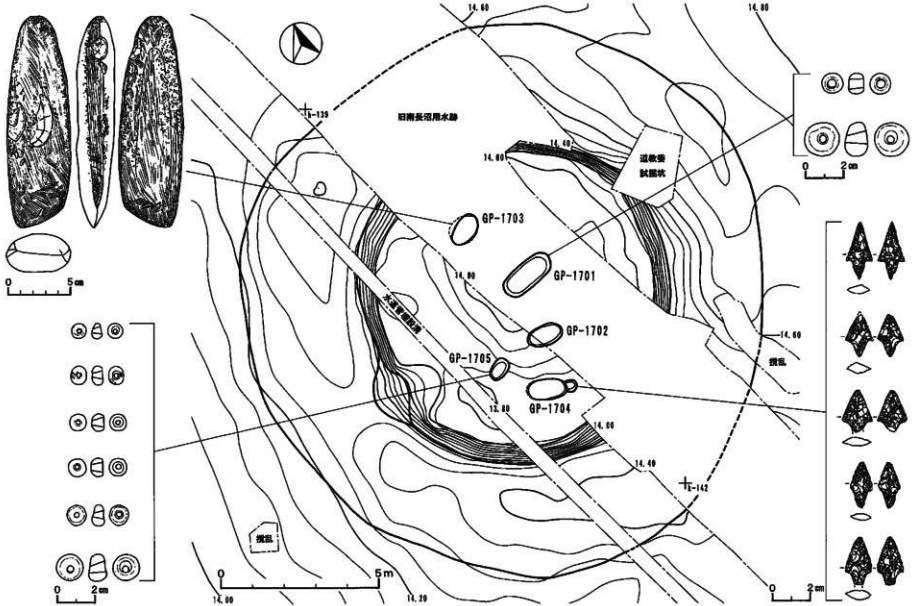
では、Ⅲ層中に南東から北西へ走る地割れの痕跡が見られた。また、Ｊ１地区の東側では、昨年度のＤ地区と同様、旧南長沼用水を埋め立てた跡が確認された。

遺構は周堤墓１基、焼土306カ所を検出した。遺物は約１万点出土している。土器は縄文時代早期末葉の東釧路Ⅳ式、次いで同後期後葉の堂林式が多い。石器は石鏃（石刃鏃１点を含む）、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石などがある。

17号周堤墓は旧南長沼用水によって中央部を破壊されているが周堤の残存は良好である。断面観察から竪穴の中央がマウンド状に掘り残されていた可能性が高い。また、西側の周堤に若干低い箇所があり、その内側は竪穴が掘り込まれておらず、舌状の高まりが突き出ている。墓壙は５基検出され、いずれも壙底にベンガラ（酸化第二鉄）が撒かれていた。遺体の残りは悪く、黒褐色の有機質土が確認される程度であった。中央に位置する墓壙ＧＰ－1701からは、ヒスイ製の玉２点が出土している。ＧＰ－1702は、ベンガラが覆土中と壙底の２段に分けて撒かれていた。ＧＰ－1703は、緑色泥岩製の石斧が１点出土した。ＧＰ－1704は東端の付属ピットから壙口にかけて砂岩の礫片が散乱していた。また、先端や茎部を打ち欠いた石鏃11点が壙底から弧を描くような状態で出土した。ＧＰ－1705では、ヒスイ製の玉６点が３つずつ並んで出土している。



キウス遺跡群と調査範囲



17号周堤墓と墓壙出土遺物

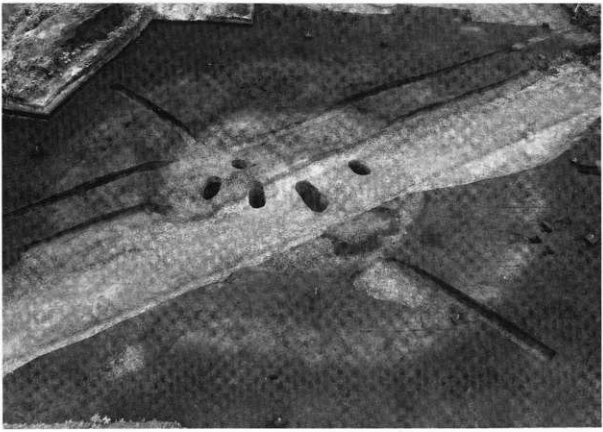
G地区　盛土遺構調査状況（南西から）

注口土器出土状況

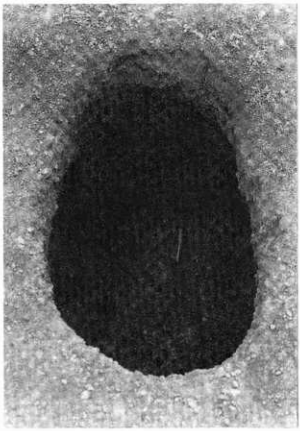
土偶の頭部

P－1168　人骨出土状況（頭部）

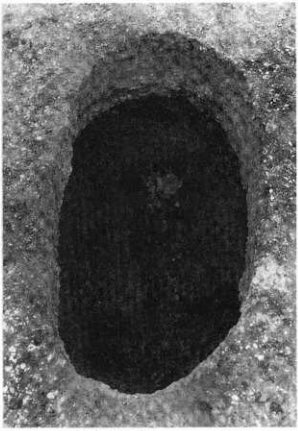
動物形土製品



17号周堤墓（東から）



GP－1703　石斧出土状況



GP－1704　遺体層検出状況

キウス４遺跡Ｊ２・Ｒ地区（Ａ－03－92）

事 業 名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：千歳市中央208－16ほか

調査面積： 5,580㎡

発掘期間：平成10年５月６日～11月11日

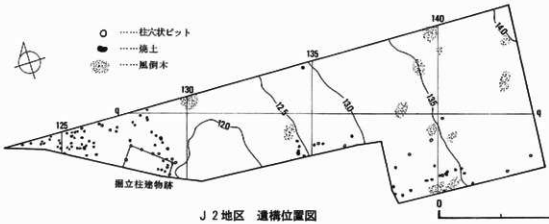
調 査 員：佐川俊一、和泉田 毅、藤井 浩、玉邑肇章、阿部明義、山中文雄、菊池慈人

遺跡の概要

遺跡全体の立地・土層、調査の経緯については、「キウス４遺跡Ｇ・Ｊ１・Ｊ３～Ｊ６地区」で述べているのでここでは省略する。Ｊ２・Ｒ地区は高速道路のインターチェンジ部分にあたる。昨年度調査したＩ地区を挟み、東側にＪ２地区（1,340㎡）、西側にＲ地区（4,240㎡）がある。Ｒ地区の西側はＱ地区に隣接している。遺構・遺物の主体となる時期は、縄文時代後期中葉～後葉である。

Ｊ２地区

キウス４遺跡の南東部、今年度周堤墓が発見されたＪ１・Ｊ６地区の南側に位置する。調査区は、標高12～14ｍで東から西にやや傾斜している。遺構は焼土80カ所、柱穴状小ピット20基を検出した。焼土は主にＶｂ層上面付近において検出されている。柱穴状小ピットは、Ｖ層上面付近において検出されたものであるが、樽前ａ降下軽石層が混入していることからみて擦文～アイヌ文化期のものと思われる。出土遺物は合計1,943点である。土器は、縄文早期・中期・後期・擦文が計763点出土した。主体は縄文早期および後期である。石器・礫は1,172点出土した。石鏃がやや多いが、大半は調査区西側出土のフレイク・チップである。その他に古銭（寛永通宝）、鉄製品等も出土している。



Ｊ２地区 遺構位置図

Ｊ２地区 掘立柱建物跡（南東から）

Ｊ２地区 完掘（南西から）

R地区

調査区はキウス4遺跡の南西部に位置する。標高9～10mの段丘面および標高7～8mの低地があり、その間は南から西側では段丘崖、東側では緩斜面になっている。西側の段丘面の大半は、耕作によりⅧ層中まで削平されている。

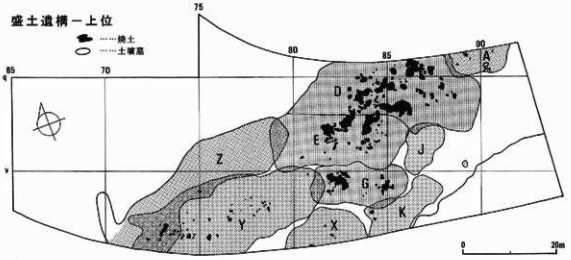
遺構　調査区北東から南西にかけて、盛土遺構がある。これは周堤墓群からのびる南側盛土遺構の大部分に相当する。調査区内で検出された範囲は、長さ約80m、幅約40m、厚さは最大約0.8mに達している。盛土各層は、北の段丘側から南の低地側に向かって押し出されたように重なって堆積している。盛土遺構は大きく2層（上位・下位）に分けられ、上位は黄褐色土を主体として明るく、下位は暗褐色土を主体として暗い。また土器の出土状態でも差異がみられ、上位では細片のものが多いが、下位では大きな破片が多く、その場でつぶれた状態の土器や完形のものも多数見られる。調査にあたっては、盛土の高まりや色調から計14ブロックに分け、ブロック毎に分層した。盛土中からは、焼土322カ所、フレイク・チップ集中10カ所が検出された。焼土はその場で焼成されたと考えられるものが多いが、流水等により流されたとみられるものや、投棄されたとみられる赤色部が不均質な焼土も数多く確認された。また、灰・粘土・炭化物・鉱石・赤色顔料の集中部も検出された。

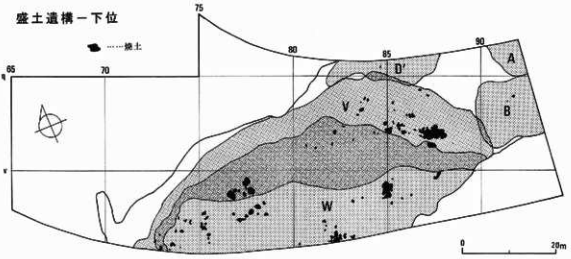
盛土遺構以外の遺構では、住居跡、土壙・柱穴状ピット約2,000基、Vb層上面付近からは焼土が264カ所検出された。住居跡は、縄文早期後半とみられるものが緩斜面および低地で2軒、後期中葉～後葉の時期と思われる出入口に当たるへの字状の小ピットをもつものが段丘上で7軒以上検出されている。土壙には、墓・貯蔵穴、また柱穴状ピットには大型柱穴・小柱穴がある。土壙墓とみられるもののうち1基は盛土上面付近から掘り込まれている。貯蔵穴とみられるフラスコ状のピットは、主に盛土遺構の縁辺部に見られる。Vb層上面付近の焼土は、調査区東部の盛土遺構の下に集中している。上面に赤色部の不明瞭な小規模の焼土群があり、その下から明度の高いやや大型の焼土群が検出された。

遺物　土器・石器等合計約120万点を数えたが、このほかに微細なフレイク・チップ、骨片、炭化物などが多量に出土している。遺物の大部分は盛土遺構に含まれていたものである。また、盛土遺構の土は、微細な遺物を多く含むためすべて採取し、次年度水洗・選別作業を行う予定である。その総数は土のう袋で約98,000袋にのぼっている。

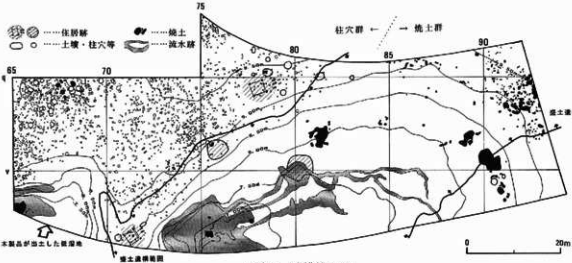
土器は全出土遺物の8～9割を占める。縄文時代後期の銛潤式～堂林式がほとんどであるが、縄文時代早期後半・後期前葉の土器も若干見られ、縄文中期・擦文土器もわずかに出土している。また東北地方由来の土器もあり、これらの土器にはベンガラ・朱漆といった赤色顔料が塗布されている。石器・礫等は、全出土遺物の約1割程度である。定形的なものでは、石鏃・石錐・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石斧・たたき石・すり石・砥石・台石があるが、中でも石鏃の数の多さが目立つ。土製品・石製品も多数出土している。土偶・スタンプ形土製品・ミニチュア土製品・垂飾・異形石器・オロシガネ状石製品・石棒・ヒスイ玉などがある。その他朱漆の塗膜が出土しており、飾り弓や椀の一部とみられるものもある。また、盛土中から焼骨の小片が多量に出土している。

今回の調査で特に注目すべき遺物として木製品がある。そのほとんどは調査区南西部の段丘崖を下った低地、特に流水跡から出土しており、縄文時代後期の銛潤式～堂林式土器を伴っている。容器・石斧の柄・槌状木製品・スダレ状製品・杭などがある。容器には、脚が付いているものや側辺部に抉りが見られるものもある。斧の柄にはグリップエンドの加工がある。スダレ状の製品はヨシのような草の茎を束ねたものである。「ウケ」に酷似する樹皮製漁具とみられるものも出土した。また流水路付近で、杭状に木が直立した状態で多数出土し、列をなすものも見られた。

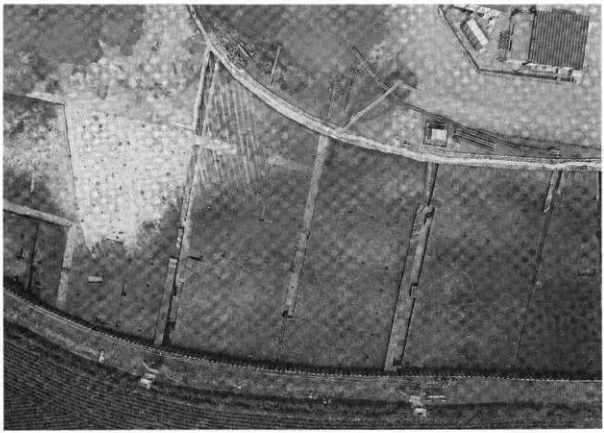




全体図（盛土遺構以下）



R地区　遺構位置図



盛土遺構－上位　全景

盛土遺構　土層断面

盛土遺構－上位　遺物出土状況

盛土遺構－下位　遺物出土状況

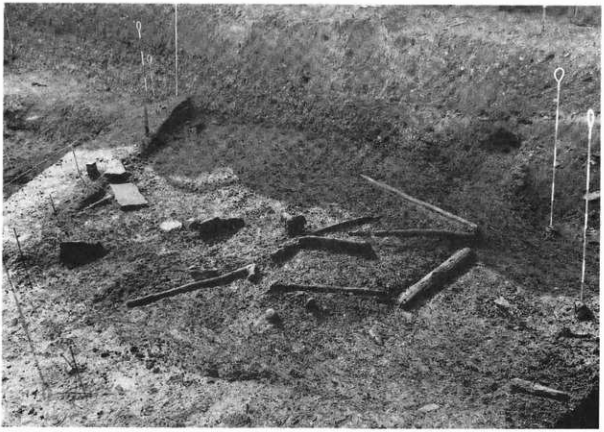
焼土中に埋設された土器

木製容器

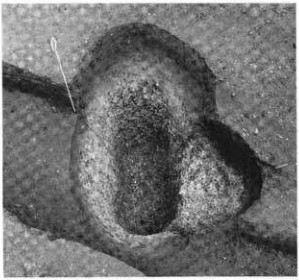
斧の柄

楯状木製品

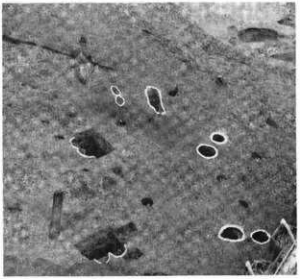
杭　列



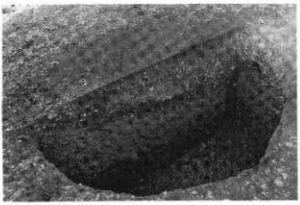
流水跡と木製品（北西から）



盛土上から掘り込まれた墓



住居跡（縄文後期）



フラスコ状ピット

竪穴住居跡（縄文早期）

土壙・柱穴群完掘（西から）

キウス４遺跡Ａ２・Ｑ地区（Ａ－03－92）

事 業 名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：日本道路公団北海道支社
所 在 地：千歳市中央208－16ほか
調査面積：6,150㎡
発掘期間：平成10年５月６日～10月31日
調 査 員：熊谷仁志、谷島由貴、鎌田　望、笠原　興、柳瀬由佳、菊池慈人

Ａ２地区

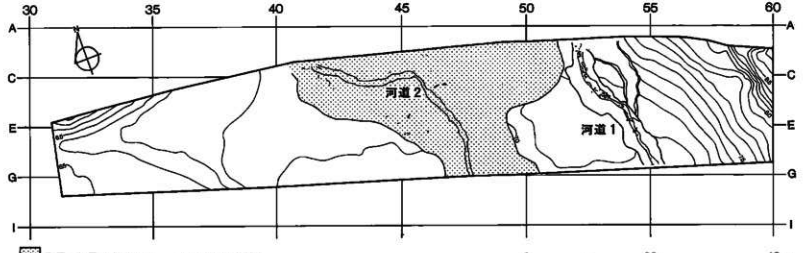
Ａ２地区は丘陵緩斜面の西端に立地する。調査面積は2,230㎡である。調査区は東西に細長く、東側から西側に下がる緩斜面で、低湿部と緩やかな斜面部分からなる。南側は平成８年度調査のＬ地区と平成９年度調査のＡ地区に隣接する。基本層序は「キウス４遺跡Ｇ・Ｊ１・Ｊ３～６地区」で述べている。Ⅲ層中において調査区の中央部と東側に河道跡が２カ所検出された。そして、西側に向かうにしたがいⅢ～Ⅴ層間には、泥炭の発達や砂の堆積が確認され、泥炭層・砂層の層厚はⅣ層を挟み２ｍをこえる堆積も認められ、西側調査範囲境界ではⅠ～Ⅶ層までの深さが４ｍに達する部分もあった。

遺構　Ⅲ層で河道跡２カ所、Ⅴ層で竪穴住居跡５軒、土壙26基、焼土66カ所、柱穴状ピット124基を検出した。

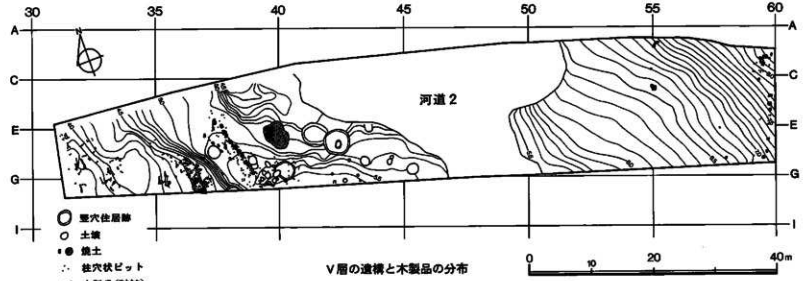
Ⅲ層の調査で検出した河道１は、調査区東側のＡ－52区～Ｆ－55区にかけて南北方向に、河道２は調査区中央部のＢ－40区～Ｆ－47区にかけて北西から南東方向に検出された。河道１はＬ地区から、河道２はＡ地区から続くものである。河道１はⅡ層が河道の堆積物を覆い、白頭山－苫小牧火山灰（Ｂ－Tm）とⅣ層を切っている。河道内からはアイヌ文化期と思われる木製品が約200点出土し、先端を櫂状に加工した棒状製品、長さ10cmほどの箆状製品のほか、板材・打ち込み杭、樹皮製品等がある。河道２はⅡ層とＢ－Tmに覆われ、河床（Ⅶ層中）付近から続縄文時代の恵山式土器１個体と木製品が出土している。

遺構・遺物の分布は、河道２を挟んで様相が異なる。東側の緩斜面からは焼土を検出したのみで、遺物は縄文時代後期後葉を主体に旧石器時代、縄文時代早期後半・前期前半のものが出土している。西側からは縄文時代早期～前期の遺構・遺物を検出した。西側の尾根状に張り出す微高地上からは、縄文時代早期～前期の遺構が検出された。これらはＡ地区から続くもので、住居跡は斜面に、土壙は平坦部に、焼土および柱穴状ピットは尾根に沿って分布している。

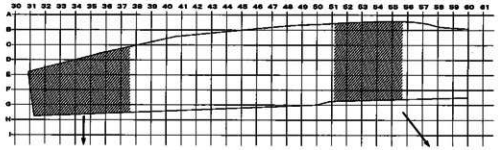
遺物　Ⅰ・Ⅲ～Ⅴ層から約24,100点出土した。内訳は土器約13,500点、石器等約10,000点、木製品約600点である。土器は、東側からは縄文時代後期後葉の堂林式を主体に、早期末葉の東釧路Ⅳ式、前期前半の綱文式等が出土した。西側からは早期末葉のコッタロ式・中茶路式・東釧路Ⅳ式、前期初頭の花積下層式直前に位置付けられる美沢３式、花積下層式に相当する美々７式・綱文式等の土器が出土した。微高地の西斜面から低地にかけては、美々７式土器や各種の石器等と共に大量の木製品・流木等が出土している。木製品には先端を尖頭状に加工した棒状製品や割板材があり、ほかに伐採痕のあるもの、人為的な焼け焦げ痕のあるもの等がある。また、低地からは黒曜石のフレイク・チップや割った痕跡のあるクルミの集中等が検出された。

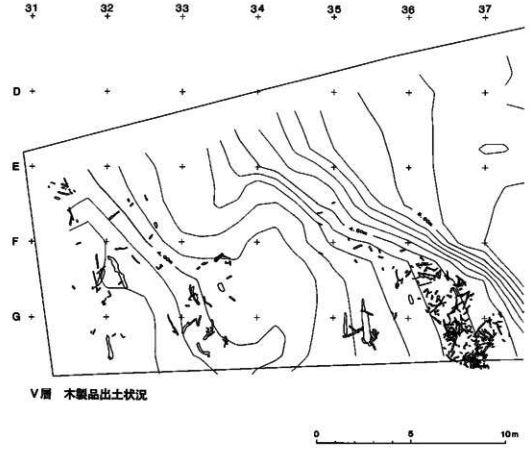


III層の河道と木製品の分布

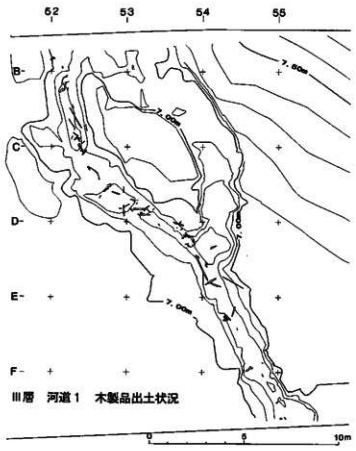


V層の遺構と木製品の分布

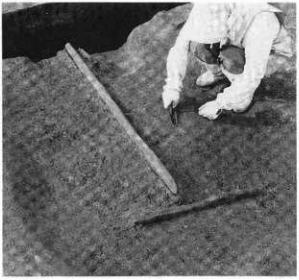




V層　木製品出土状況

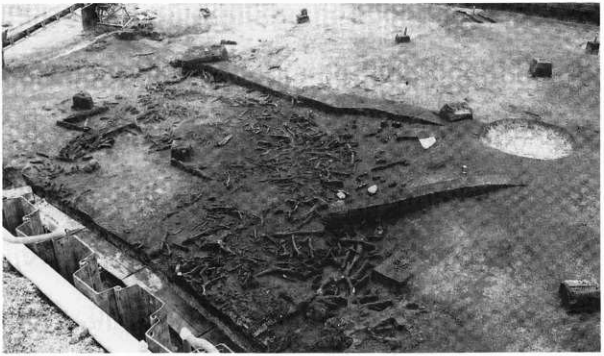


III層　河道1　木製品出土状況



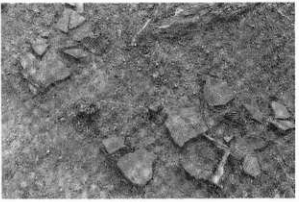
河道１　棒状木製品出土状況

河道１　箆状木製品出土状況



Ⅴ層西側斜面　遺物出土状況（南東から）

Ⅴ層西側斜面　棒状木製品出土状況



Ⅴ層西側斜面　土器出土状況

Q地区

調査区は、緩やかに傾斜しながら北東から南西に張り出す舌状台地の根元部分で、北西側と南東側は落ち込む地形である。Q地区の北側は平成9年度に調査を実施した縄文時代後期後葉の堂林式期の住居跡や同期の柱穴状ピット・盛土遺構等が検出されたH・K地区に隣接する。南東側は今年度調査範囲で、縄文時代後期後葉の堂林式の頃の盛土遺構や多くの土壙・柱穴状ピットが検出されたR地区に隣接する。基本層序はA2地区と同様である。V層中には恵庭a降下軽石を含む盛土層が部分的に分布していた。また、VI層（漸移層）が欠落し、V層下位にはV層起源の黒色土と恵庭a降下軽石が混じりあった整地の痕跡と考えられる土層が認められた。耕作・削平による撹乱は、ほぼ調査区全面のV層中位まで及び、部分的にはVII層まで達していた。

遺構　遺構は住居跡34軒、土壙291基、柱穴状ピット約4,700基、溝状遺構1基、焼土84カ所が検出された。住居跡のほとんどは耕作・削平によって壁や床面を消失しているが、出入口状ピット・焼土・主柱穴・壁柱穴等の配列によって確認した。住居跡の時期はその形態から縄文時代後期後葉の堂林式期の頃と思われる。この他に後期前葉のタプコプ式土器を伴うもの（1軒）、壁際の周囲に溝がめぐるもの（1軒）、時期不明のもの（1軒）等がある。なお、柱穴状ピットには4本一組の配列が認められるものも多く、住居跡の数はさらに多くなるものと考えられる。

土壙には、土壙墓、大型のフラスコ状ピット、浅い皿状ピット、大型の柱穴と思われるもの等がある。土壙墓には、平面形が円形、隅丸長方形、楕円形のものがある。壙底に赤色顔料や炭化物が認められたものや、人骨の残存状況が比較的良好で埋葬姿勢がわかるものもあった。いずれの土壙墓も副葬品を伴わず、構築時期は不明であるが、おそらく後期後葉の堂林式の頃のものと思われる。大型のフラスコ状ピットからは堂林式が、浅い皿状ピットからは入江式とタプコプ式が共伴して出土している。この入江式とタプコプ式の共伴は、道南・道央部の土器編年を考える上で貴重な資料と言えよう。大型の柱穴と思われる土壙からは、炭化した柱根も確認されている。

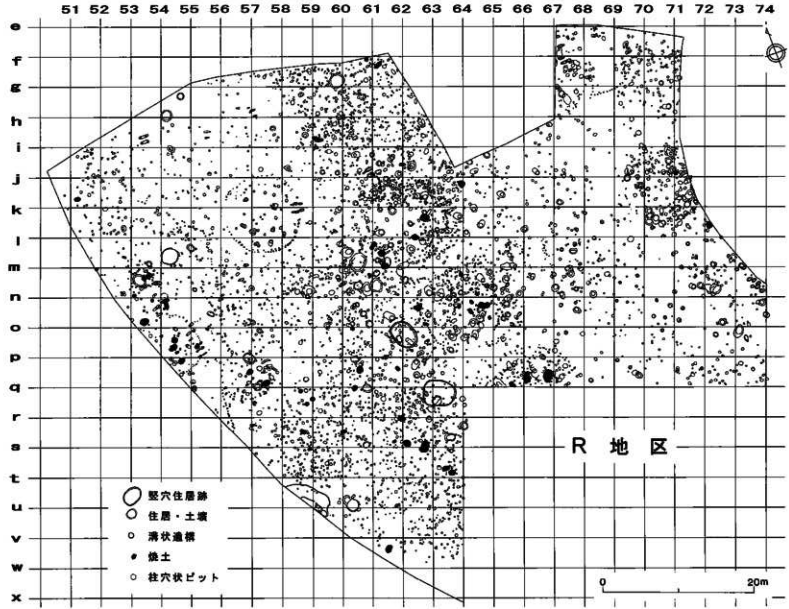
柱穴状ピットには4本一組の方形や台形の配列が認められるものも多く、主柱穴間の距離は2.5～6mである。また、建て替えを想像させる柱穴の重複や幾重にもめぐる柱穴列も認められた。このほかに柱穴の覆土から多量の遺物が出土したもの、4本一組の配列が認められいずれの柱穴からも多量の炭化したドングリが出土したもの等があった。

遺物　旧石器時代・縄文時代のものが約13万点出土した。遺物は盛土・整地層から多く出土した。R地区から続く南側斜面の整地層からは、廃棄されたと思われる遺物が多量に出土している。

土器は縄文時代早期～晩期初頭のものが出土し、主体は後期後葉の堂林式である。このほかに縄文時代早期の東釧路III式・コッタロ式・中茶路式・東釧路IV式、前期前半の綱文式・中野式、後期前半の入江式・タプコプ式、後期中葉から後半の緑潤式・エリモB式等もある。

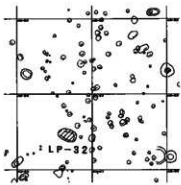
石器には旧石器と思われるエンド・スクレイパーをはじめ、縄文時代のものと思われる各種の石器が出土している。石鏃・つまみ付きナイフ・ドリル・すり石・たたき石等については、その形態的特徴から縄文時代後期中葉から後葉の土器群に伴うと思われるものが多い。

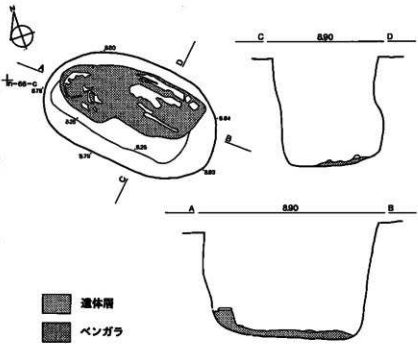
石製品には異形石器・玉類がある。玉類は比較的狭い範囲の包含層からまとまって出土している。このほかに遺構の覆土、焼土、包含層中からは、獣骨片、炭化種子、炭化材が出土している。


51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74
e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x
R 地 区
竪穴住居跡
住居・土壙
溝状遺構
焼土
柱穴状ピット
0
20m

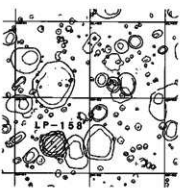
Q地区　遺構位置図

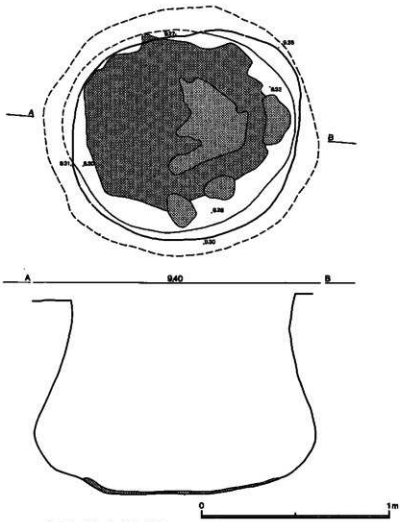
LP－32



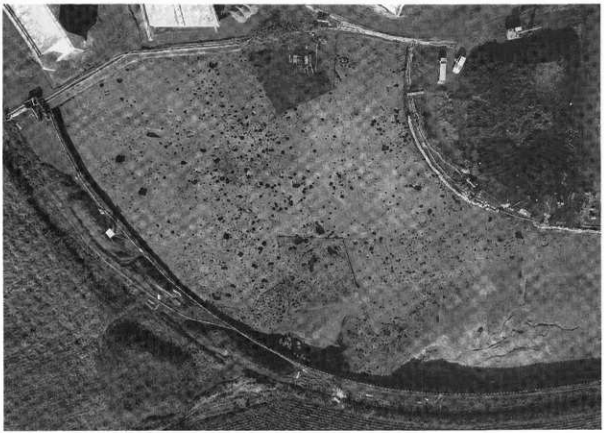


LP－158



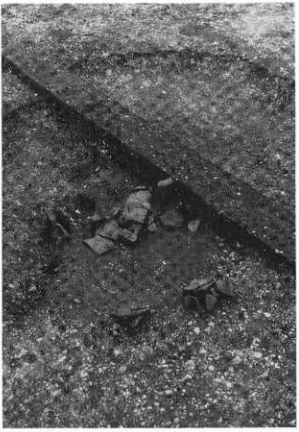


LP－32、LP－158



Q地区全景（空撮）

ＬＰ－32　人骨検出状況



ＬＰ－85　遺物出土状況

キウス５遺跡（Ａ－03－93）

事 業 名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：千歳市中央1048－１ほか

調査面積：1,648㎡

調査期間：平成10年５月６日～６月30日

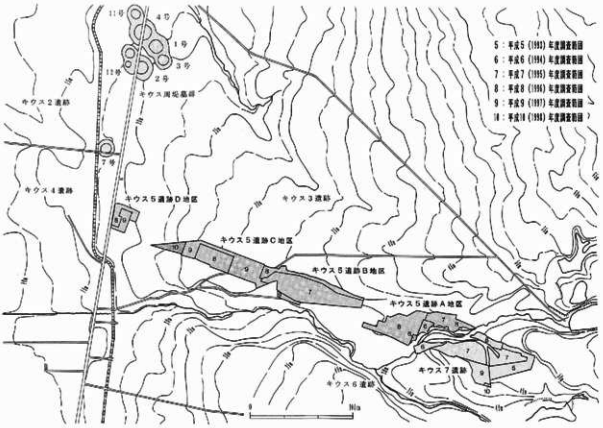
調 査 員：熊谷仁志、鎌田 望、笠原 輿

調査の概要

平成６年度から続く調査の最終年度である。今年度はＣ地区西端、標高21～25ｍの緩斜面部を調査した。基本土層は、キウス４遺跡に同じである（ｐ41.参照）。

遺構は検出されなかったが、Ⅷ層（恵庭ａ降下軽石）上面で、径約50㎝、深さ約1.3ｍの垂直な落ち込みを１カ所確認した（次頁写真）。埋土はⅦ層（黄褐色ローム）で、遺物は伴わない。昨年度、同様の落ち込みがキウス４遺跡、キウス７遺跡で検出されたが、人為的な遺構かどうかは不明である。

遺物は、縄文時代中期・後期・晩期の土器56点、石器等166点が出土した。石器には石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石皿がある。このほかに旧石器時代の遺物として石刃１点、細石刃２点が出土した。



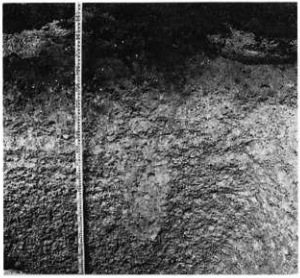
遺跡の位置と周辺の地形

調査状況（西から）

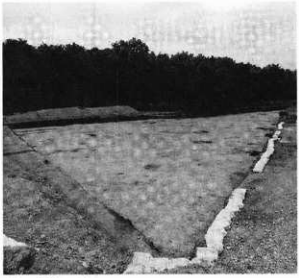
遺物出土状況

遺物出土状況

遺物出土状況



ローム質埋土の土層断面



完掘（北東から）

キウス７遺跡（Ａ－03－265）

事 業 名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：日本道路公団北海道支社
所 在 地：千歳市中央852－75ほか
調査面積：130㎡
発掘期間：平成10年５月６日～５月31日
調 査 員：熊谷仁志、鎌田 望、笠原 巽

調査の概要

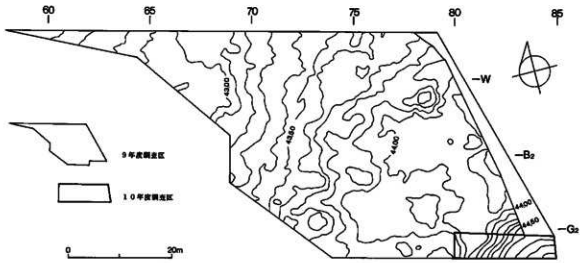
キウス７遺跡は馬追丘陵の西側縁辺部を流れるキウス川流域の遺跡群の中では、最も東に位置する。平成５年度から始まった調査では、縄文～擦文時代の遺構、遺物が多数見つかっている。今年度は、キウス川左岸の段丘上に位置する緩斜面の南東隅（標高約42～44ｍ）の調査を行った。基本土層は、キウス４遺跡に同じである（Ｐ41.参照）。遺構、遺物の検出層位は、Ⅲ層が縄文時代晩期から続縄文時代、Ⅴ～Ⅵ層が縄文時代早期・中期～晩期、Ⅵ～Ⅶ層が旧石器時代である。

今年度、遺構は検出されなかった。遺物は縄文時代早期後葉のコッタロ式を中心とした土器片160点、石器等162点が出土した。昨年度出土した旧石器時代の遺物は、今回出土していない。

遺物一覧

	Ib－1	Ib－2	IVa	IVb	Vc	VI	土器計	石 鏃	両面加工石器	石斧片	磨石片	フレイク	礫・礫片	石器計	合 計
Ⅴ 層	2	99	10	1	2	5	119	0	1	4	0	8	122	135	254
Ⅵ 層	2	20	1	0	0	0	23	1	0	2	0	0	17	20	43
風倒撹乱	0	18	0	0	0	0	18	0	0	0	1	1	5	7	25
計	4	137	11	1	2	5	160	1	1	6	1	9	144	162	322

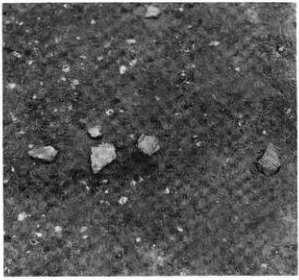
＊表採遺物（フレイク１点、礫・礫３点）は風倒撹乱の欄に集計した



調査区域図（等高線はⅤ層上面）

調査状況（北西から）

調査状況（西から）



遺物出土状況

たたき石出土状況

礫群出土状況

完掘（東から）

ユカンボシC15遺跡（A－03－263）

事 業 名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：千歳市長都1190－11ほか

調査面積：3,000㎡

発掘期間：平成10年5月6日～9月12日

調 査 員：西田 茂、三浦正人、中田裕香、鈴木 信、吉田裕吏洋、大泰司統、田口 尚、菊池慈人

遺跡の概要

ユカンボシC15遺跡は、ＪＲ千歳駅の北方約6㎞にあり、標高は5～9ｍである。周囲は千歳川、長都川、ユカンボシ川の水を集める停滞水域であり、以前は「長都沼（オサットー）」と呼ばれる低湿地の西端部であった。遺跡は往時のユカンボシ川に面して形成されたものと推定される。

土層の区分は台地部分と低湿部分との関連を踏まえて「土層柱状模式図」のようにおこなった。また恵庭降下火山灰層よりも下位の遺物を確認するために深く掘り下げた区域がある(旧石器調査区)。

遺構と遺物

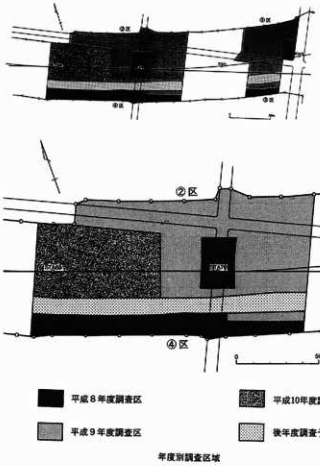
検出した遺構は、住居跡4軒、土壙墓1基、土壙10基、Ｔピット25基、焼土26カ所などである。遺物は土器4,210点、石器等3,390点、木製遺物30,100点、金属製遺物等8点が出土した。また、土壌水洗等によって種子、骨片、昆虫等も見つかっている。

第Ⅰ黒色土の遺構と遺物　多くの柱穴が検出されており、住居跡（H－36）や柵列（棚？）を推定できるものがある。土器、石器等は縄文時代晩期、続縄文時代、擦文文化期のものがある。低湿部からは多量の木製遺物が出土した。大多数は、擦文文化期、アイヌ文化期のものである。製品には、木槌、堅杵、機織具、箸類、串類、へら状製品、矢中柄、やす、銛の中柄などがある。前年度の調査でも注目されていた舟の部材、製品類が今回も多数出土した。具体的には舳先、艫（とも）、舷側板、舟胴の支え板、車櫂、車権受台部、早権などである。このほか柱、杭などの建材、割材類、枝材、柾目板、切片、炭化材、樹皮、穀木類などが断片を含めて多数出土している。漆椀、曲げ物などの移入品とみられるものもある。

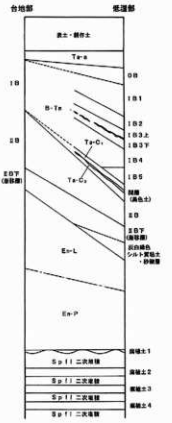
遺 跡 の 位 置

第Ⅱ黒色土の遺構と遺物　遺構は縄文時代中期、後期の住居跡、土壙、Ｔピット、焼土がある。土器、石器等は縄文時代中期、後期、晩期のものが、台地部のみならず、低湿部（標高6～7ｍ）からも検出されている。

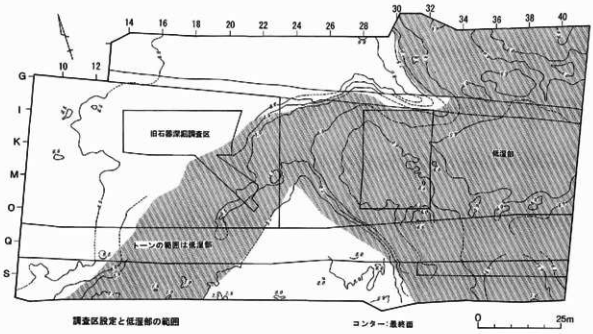
旧石器深掘調査区　恵庭ａ降下軽石層よりも下位で埋没樹林跡が検出され、腐植土3・4層からは黒曜石の剥片3点が出土した。これらのうち2点には微細な剥離痕が認められる。



年度別調査区域



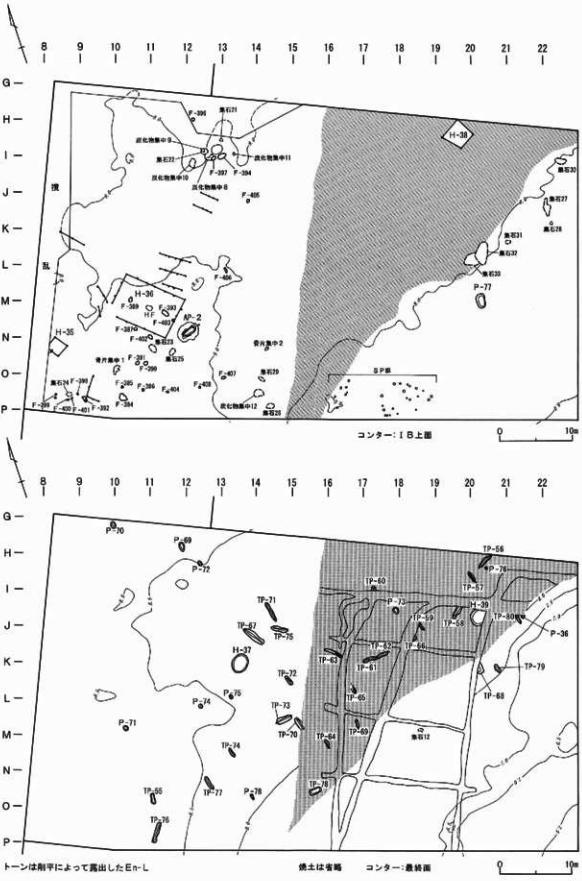
基本土層模式図



調査区設定と低湿部の範囲

コンター：最終面

調 査 範 囲 図 等



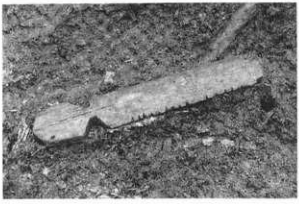
遺構位置図（上：第Ⅰ黒色土　下：第Ⅱ黒色土）

調査状況（北から・ＩＢ１）

舷側板・車櫂出土状況（ＩＢ３）

材集中検出状況（ＩＢ３）

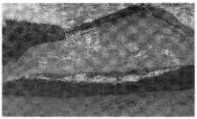
漆椀出土状況（ＩＢ２）



機織具出土状況（ＩＢ３）

木槌出土状況（ＩＢ２）

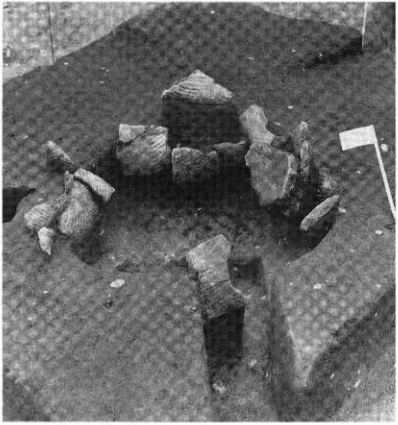
H－36　検出状況（南西から）



H－36　炉断面（南西から）

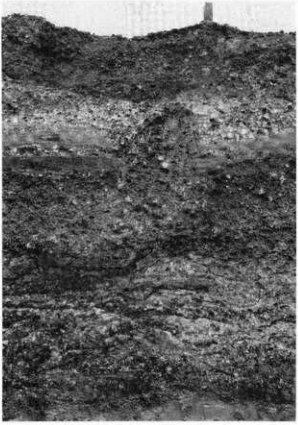
H－36　柱穴断面（南から）

調査状況（北から）

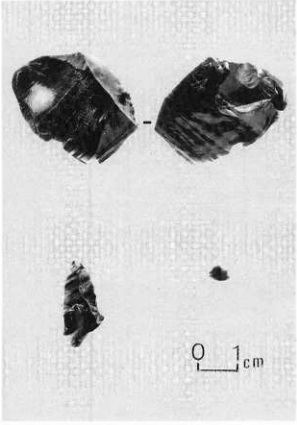


P－75　遺物出土状況（北西から）

埋没林検出状況（南から）



旧石器確認調査用トレンチ土層断面（南から）



旧石器確認調査出土の石器等

ユカンボシＥ７遺跡（Ａ－03－８）

事 業 名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：恵庭市戸磯147－５ほか

整理期間：平成10年４月11日～平成11年３月31日

調 査 員：立川トマス、末光正卓

遺跡の概要

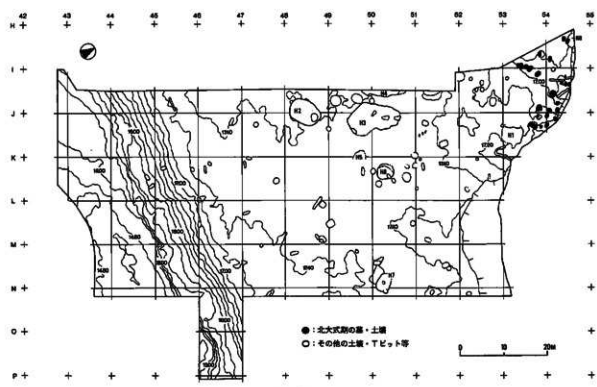
今年度は、平成８・９年度の調査によって得られた遺物の整理と、報告書編集作業を行った。遺跡は、恵庭市街から南東へ約３km、千歳市との境にあたる戸磯地区のユカンボシ川右岸に位置する。ユカンボシ川は、漁川扇状地を流れる河川の一つで、延長約５km、幅約２ｍの小河川である。周辺には約20カ所以上の遺跡が確認されており、恵庭、千歳両市においても遺跡密度の濃い地域である。市道26号を挟み、南側にユカンボシＥ10遺跡が隣接している。ユカンボシＥ７遺跡は、平成７年度に恵庭市教育委員会によって本調査区より北西のユカンボシ川右岸縁辺部の調査が行われている。

平成８・９年度の２カ年にわたる調査により、縄文時代、続縄文時代、擦文時代、アイヌ文化期とみられる多くの遺構、遺物が検出された。とくに、平成８年度の調査では、調査区北側のユカンボシ川低位段丘上から、北大式期の土壙墓群が確認されている。

遺構と遺物

遺構は、竪穴住居跡８軒、土壙74基、Ｔピット19基、小型Ｔピット４基、打ち込み杭跡16カ所、焼土143カ所、集石３カ所を確認した。

竪穴住居跡は、48ラインから北側段丘崖にかけてのもっとも平坦な段丘上に分布する。Ｈ－１は擦文時代の住居跡で、被火災住居である。中心部に向かって倒れた炭化材と床面から木製品が検出され



遺構位置図

た。H－2・3・7は床面に土器囲い炉を持つもので、使用されている土器片から、H－2・3が縄文時代後期初頭、H－7が同中期末葉とみられる。住居跡の形態や出土遺物からみて、H－4はH－3と、H－8はH－7と同時期と考えられる。H－5・6は時期不明である。

土壙は74基が確認され、調査区の全域に分布している。平面形は円形、楕円形、隅丸方形などを呈する。共伴遺物が少ないため時期の特定はできない。これらのうち、北大式期の墓が23基確認された。墓の中からは、数多くの副葬品とみられる土器、鉄器などが出土している。

Tピットは、19基が確認され、調査区全域にみられる。確認面における平面形は溝状のものと楕円形のものがあり、長軸方向に共通性はみられない。また、STPと呼称した小型のTピット様のものも4基確認されている。

遺物は、土器89,417点、石器等44,764点、鉄・土・石製品79点の合計134,260点が出土している。

土器は、縄文時代早期から晩期、続縄文時代中頃、続縄文時代末葉から擦文時代初頭のものが出土した。各時期の土器は、次のとおりである。

縄文時代早期は前半の貝殻文が施された土器と後半の東釧路式系のもの、同前期は前半の羽状縄文を特徴とする土器や後半の円筒土器下層式に並行するもの、同中期は後半の天神山式や北筒式（トコロ6類）などがある。同後期はほぼ全般にわたって出土しており、余市式・タプコプ式、ウサクマイC式、手稲式、堂林式土器などがある。同晩期は後半頃と考えられるものがある。続縄文式土器は恵山式、後北式の初め頃のものがある。続縄文時代末葉から擦文時代初頭の北大式のものもある。北大式土器は、そのほとんどが墓あるいはその周辺から出土したものであるが、このほかに旧河道近くのN－46・47区から小型の甕などが出土している。

このほかに、縄文時代中期の大木式と思われる破片が出土している。胎土などからみて、搬入品の可能性が考えられる。

石器等は、フレイク・チップ、礫などを含め44,764点が出土した。このうち剥片石器が1,069点、礫石器が2,555点である。剥片石器では石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパーがみられ、石鏃、石槍、スクレイパーが多い。礫石器では石斧、たたき石、台石・石皿、すり石、砥石等がみられ石斧、砥石の出土割合が高い。ただし、石斧、砥石については小破片が大半を占める。石質は、剥片石器が黒曜石・頁岩、礫石器には緑色泥岩・安山岩が多く使用されている。

北大式期の墓について

23基の続縄文時代末葉から擦文時代初頭の北大式期の墓を確認した。このほかに同時期と思われる土壙（墓の可能性もある）が3基ある。これらの墓および土壙は、調査区北側の53～54ライン間に集中している。調査区北端に位置するいくつかの墓は、旧ユカンボシ川の浸食作用によりその一部が崩壊しているものがある。墓の規模は、平均値で長軸約1.0m、短軸約0.7m、深さ約0.6mである。平面形は円形、楕円形、隅丸方形などを呈し、長軸方向の南東側壁に袋状ピットをもつものが多い。また、壙底面に柱穴様の小ピットをもつものも4基確認された。

墓に副葬されたと考えられる遺物には、土器、鉄器、礫、黒曜石の原石などがある。

土器は墓壙内、壙口部、墓壙周辺の包含層から出土しており、復原個体は40個を数える。これらの土器は口頸部の文様等から①縄文があるもの、②器面調整のみのもの、③沈線文が施されるものに分類される。

鉄器は斧、鑿、小刀、刀子、鏃など35点が出土している。鉄器が副葬された墓は、P－1・18・19・26・28・29・38の7基で、すべて調査区北西側に集中している。特にP－1・28からの出土が多い。

黒曜石の原石は、P－1から拳大ほどのものが2点出土した。これらは原産地分析の結果、赤井川

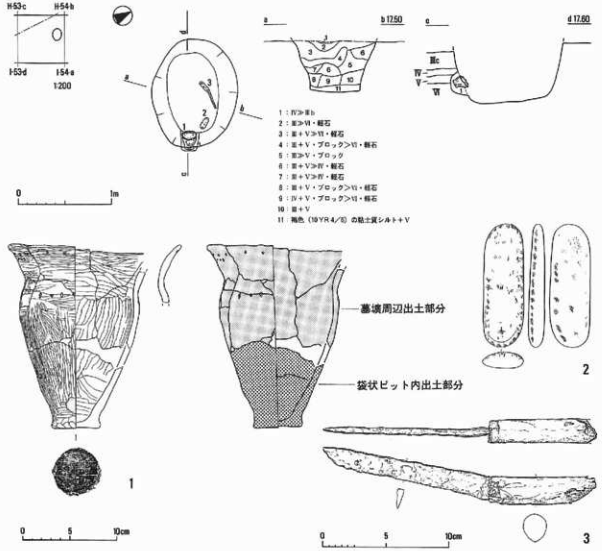
産と推定された。礫はすべて、埋葬された遺体の頭部付近から出土している。

遺構検出数一覧

調査年度＼遺構	住居跡	土　壙	Tピット	小型のTピット様のもの	打ち込み杭跡	焼　土	礫集中
平成8年度	6軒	50基	8基	4基	16カ所	58カ所	2カ所
平成9年度	2軒	24基	11基	−	−	85カ所	1カ所
合　計	8軒	74基	19基	4基	16カ所	143カ所	3カ所

遺物出土点数一覧

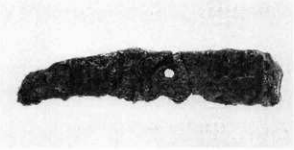
調査年度＼遺物	土　器	石器等	鉄・土・石製品	小　計
平成8年度	47,344点	22,237点	60点	69,641点
平成9年度	42,073点	22,527点	19点	64,619点
合　計	89,417点	44,764点	79点	134,260点



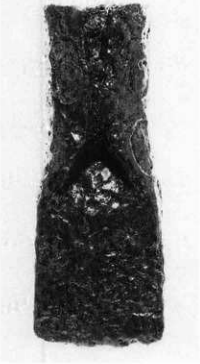
P－29と出土遺物

P－29出土の土器

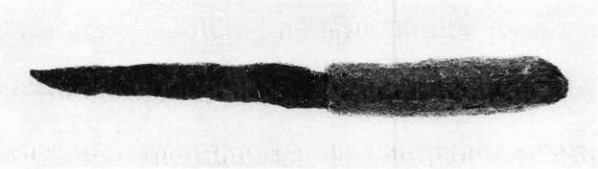
P－32出土の土器



P－28出土の鎌



P－1出土の鉄斧



P－28出土の刀子

3　研修・研究会等

(1) 研修・研究会参加

＊奈良国立文化財研究所埋蔵文化財担当事務員特別研修
「埋蔵文化財基礎課程」　小杉　充　6月17日～6月25日
＊奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者研修
「保存科学課程」　倉橋　直孝　7月22日～8月5日
「環境考古課程」　冨永　勝也　10月21日～11月11日
「遺跡地図情報課程」　皆川　洋一　12月17日～12月22日
＊全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会（京都市）　6月11日～6月12日
参加者　中田　仁・瀬崎俊則
＊全国埋蔵文化財写真技術研究会（奈良市）　7月3日～7月5日
参加者　菊池慈人
＊全埋協コンピューター等研究委員会（新潟市）　6月25日～6月26日
参加者　越田雅司
＊全埋協北海道・東北地区コンピューター等研究委員会（山形市）　8月27日～8月28日
参加者　越田賢一郎・越田雅司
＊全国埋蔵文化財法人連絡協議会研究会（茨木市）　10月8日～10月9日
参加者　村山誠己・中村貴志・今本宏信・末光正卓
＊地方公共団体における公共工事の契約実務者研修会（札幌市）　10月8日～10月9日
参加者　吉田貴和子・小杉　充
＊アイヌ民族文化財専門職員等研修会（札幌市）　10月22日～10月24日
参加者　藤本昌子・田口　尚・田中哲郎・鈴木　信
＊全国埋蔵文化財法人連絡協議会北海道・東北地区会議（郡山市）
参加者　村山誠己・吉田貴和子・礪田千秋　10月22日～10月23日
＊全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修（韓国）　10月26日～10月31日
参加者　佐藤哲人・佐藤和雄
＊全埋協コンピューター等研究委員会（横浜市）　11月5日～11月6日
参加者　畑　宏明・越田雅司
＊北海道教育関係公益法人研修会（札幌市）　11月6日
参加者　中田　仁・村山誠己
＊北海道教育委員会専門職員(学芸員、文化財保護主事、司書)研修会（札幌市）
11月24日～11月25日
参加者　越田賢一郎・西田　茂・遠藤香澄・谷島由貴
藤本昌子・越田雅司・笠原　興・鎌田　望
中山昭大・袖岡淳子・阿部明義
＊全国公益法人協会「収支予算編成実務研修」　12月1日
参加者　小笠原　学
＊南北海道考古学情報交換会（南茅部町）　12月5日～12月6日
発表者　高橋和樹　「道央部を中心とした縄文時代の墓制について」
皆川洋一　「長万部町　富野3遺跡」
越田賢一郎　「千歳市　柏台1遺跡」
阿部明義　「千歳市　キウス4遺跡」
遠藤香澄　「芦別市　滝里遺跡群」
参加者　佐藤和雄・袖岡淳子・立田　理

＊北海道考古学会遺跡調査報告会（札幌市）　12月19日
発表者　遠藤香澄　「芦別市　滝里遺跡群」
阿部明義　「千歳市　キウス４遺跡」

(2) 展覧会等協力

＊崇教真光記念館建設委員会　（仮称）古代歴史記念美術館での上映ＶＴＲ
平成10年１月９日～３月２日
＊日本道路公団北海道支社　道央自動車道輪厚Ｐ．Ａ．にて開催の遺跡発掘調査写真パネル展
平成10年２月５日～３月２日
＊小樽市教育委員会　第４回おたるの遺跡展「ストーンサークルの時代」
平成10年２月10日～２月16日
＊日本道路公団　「フォーラム　～群馬創造　豊かな古代　豊かな未来へ～」
平成10年３月７日
＊北海道教育委員会　第22回道民ホール文化財展「環状列石と周堤墓」
平成10年２月23日～２月27日
＊山梨県明野村教育委員会　明野村埋蔵文化財センター常設展示室でのパネル展示
平成10年３月31日～６月19日
＊乃村工藝社北海道支店　美深町郷土資料館内遺跡解説パネル
平成10年５月18日～５月29日
＊恵庭市郷土資料館　考古学講座「ユカンボシを探る」の資料展示
平成10年５月18日～６月23日
＊北海道開拓記念館　第46回特別展「雪と寒さと文化　－北のくらしと技術－」
平成10年７月１日～８月30日
＊帯広百年記念館　第21回特別企画展「幻の黄金郷　戸賀知登場」
平成10年７月18日～８月16日
＊仙台市歴史文化事業団仙台市富沢遺跡保存館　平成10年度特別企画展「アクセサリーの考古学」
平成10年７月18日～９月20日
＊崇教真光救い主様顕彰記念館建設委員会　（仮称）古代歴史記念美術館での映像使用
平成10年７月24日～８月14日
＊北海道開拓記念館　第47回特別展「うるし文化　－漆器が語る北海道の歴史－」
平成10年９月18日～11月３日
＊上磯町教育委員会　「かみいその縄文展」
平成10年11月14日～12月13日

(3) 部内研修・報告会

＊発掘調査現場研修会（長万部町）　９月14日～９月15日
・講演　「道南の考古学と文化財保護」
久保　泰（松前町教育委員会文化財課長）
・現場研修　「地形・地質の観察」
＊発掘調査報告会　（札幌サンプラザ）　12月１日

※ 研修・研究会等は、平成10年のものについて記載した。

4　資料貸出し等

提　供　先	目　　的	資　料　名・内　容	期　　間
崇教真光記念館建設委員会(岐阜県)	(仮称)古代歴史記念美術館で上映予定のVTR静止画『縄文の旅』に使用	フィルム―忍路土場遺跡［弦楽器(1点)］、美々4遺跡［漆塗りの櫛(1点)］、中野B遺跡［遺景(1点)］	H10. 1. 9 ～3. 2
小樽市教育委員会	第4回おたるの遺跡展「ストーンサークルの時代」に使用(会期：平成10年2月10日～平成10年2月16日)	パネル―キウス4遺跡［X－11～14全景(1点)、GP－1008遺体出土状況(1点)］、忍路土場遺跡［石斧柄出土状況(1点)、弓・土器出土状況(1点)、巨木を使った建材(1点)、柵状遺構(1点)、発掘調査状況(1点)、C地区3rd土器出土状況(2点)、土器出土状況(1点)、5号作業跡木組遺構(1点)、巨木建材頭部(1点)、C地区Ⅳ層土器出土状況(1点)］	H10. 2. 2 ～2. 27
日本道路公団北海道支社　業務部	群馬県前橋市にて開催する「フォーラム～群馬創造豊かな古代　豊かな未来へ～」において展示(開催日:平成10年3月7日)	フィルム―社台1遺跡［亀ヶ岡式土器(1点)、吉井の沢1遺跡［琥珀玉を副葬した墓(1点)］、キウス7遺跡［注口土器(1点)］、ユカンボシC15遺跡［木製品の出土状況(1点)］、キウス4遺跡［周堤墓一空中写真(1点)］	H10. 2. 2 ～4. 15
日本道路公団北海道支社　札幌管理事務所	道央自動車道輪厚P．A．にて開催の遺跡発掘調査写真パネル展において展示	パネル―キウス7遺跡　［遺跡群遠景(1点)、　異形石器(1点)、土器を利用した炉(1点)］、キウス4遺跡［周堤墓(1点)、周堤墓の墓穴(1点)、盛土出土の土器(1点)、　盛土遺構の土層断面(1点)］、キウス5遺跡［墓とその遺物A地区(1点)、杭列C地区(1点)］、ユカンボシC15遺跡［櫂(1点)、曲げ物　(1点)、低湿部の調査の様子(1点)、舟のへさき(1点)、周溝のある墓(1点)］、ユカンボシE7遺跡［墓の調査(1点)、人骨(跡)のある墓(1点)、さまざまな副葬品のある墓(1点)、墓に納められた土器(1点)］	H10. 2. 5 ～3. 2
㈱ゼビロス	水口博也著『クジラ・イルカ大百科』(1998年7月18日、TBSブリタニカ発行)に掲載	フィルム―桔梗2遺跡［シャチ形土製品(1点)］	H10. 2. 13 ～7. 23
㈱創童社	東北電力㈱発行の広報誌　『白い国の詩』　(月刊誌)平成10年9月号特集「アイヌ文化の形成」に掲載	フィルム―美々8遺跡［A地区回転式離頭銛中柄部と魚突き銛台部(1点)、メカジキの線刻画が描かれた早櫂水掻部(1点)］	H10. 3. 20 ～9. 4
青森市環境生活部編さん室	『青森県史だより』　第4号に掲載	フィルム―茂別遺跡［動物意匠のある土器(1点)］	H10. 3. 25 ～4. 6
㈱大功社	森　浩一著『考古学へのまなざし－地中からよみがえる本当の歴史』(平成10年6月25日発行)に掲載	プリント―中野B遺跡［景観(1点)］	H10. 3. 27 ～7. 3

提供先	目的	資料名・内容	期間
㈱小学館	佐原真ほか著『古代史の論点』第6巻（1998年6月25日発行予定）「北海道の考古遺跡」特集中の参考図版として掲載	プリント―ママチ遺跡［土製仮面の出土状況（1点）、美々4遺跡［環状土籠（空撮）（1点）、土壙墓から出土した土偶（1点）］、中野B遺跡［大型竪穴住居跡（1点）］	H10. 3. 31
明野村教育委員会（山梨県）	明野村埋蔵文化財センター常設展示室でのパネル展示	フィルム―ママチ遺跡［土製仮面の出土状況（1点）］、桔梗2遺跡［シャチ形土製品（1点）］	H10. 3. 31 ～6. 19
㈱創童舎	東北電力㈱発行の広報誌『白い国の詩』（月刊誌）平成10年8月号特集「擦文文化」に掲載	フィルム―美々8遺跡［櫂（1点）］、樽遺跡［火災にあった擦文時代の住居跡（1点）、擦文時代住居跡のかまど（1点）］ プリント―オサツ2遺跡［種子（1点）］	H10. 3. 31 ～7. 23
野村　崇	北海道新聞　1998年4月11日（夕刊）「北の考古学散歩」掲載	掲載許可―忍路土場遺跡［木組み遺構（1点）］	H10. 4. 7
畑　宏明	第3回「南中国近隣地区古文化研究国際学術会議」の発表資料	フィルム・プリント―ピリカ遺跡・湯の里4遺跡［玉類（1点）］、美々5遺跡［けつ状耳飾り（1点）］、美々4遺跡［翡翠玉類（1点）］、美里遺跡群［琥珀玉（1点）］、茂別遺跡［管玉類（1点）］	H10. 4. 10 ～12. 10
㈱学生社	『縄文時代の考古学』（シンポジウム日本の考古学第2巻）に掲載	プリント―美々4遺跡［環状土籠（1点）、硬玉製玉類（1点）］	H10. 4. 20
㈶仙台市歴史文化事業団　仙台市富沢遺跡保存館	平成10年度特別企画展「アクセサリーの考古学」（会期：平成10年7月18日～9月20日）での展示及び印刷物への掲載	遺物―美々4遺跡［土製品（12点）、玉類（99点）］ フィルム―美々4遺跡［全景（1点）、周堤墓調査風景（2点）、遺物出土状況（2点）］、美沢1遺跡［周堤墓全景（1点）］、滝里安井遺跡［調査区近景（1点）、P22全景（1点）P22遺物出土状況（1点）、P25全景（1点）、P22出土遺物〈琥珀製玉・石斧・土器片等〉（2点）、P25出土遺物〈琥珀製玉・カンラン岩製玉〉（2点）］、茂別遺跡［土壙全景〈管玉出土状況〉（1点）］	H10. 5. 7 ～10. 6
日本道路公団北海道支社　業務部	「ハイウェイワンポイントガイド」に掲載	フィルム―社台1遺跡［赤色顔料を塗った土器（1点）］、吉井の沢1遺跡［コハク玉を副葬した墓（1点）］	H10. 5. 7 ～5. 29
北海道地図㈱　函館営業所	北海道開発局函館開発建設部依頼の函館空港「空の日」パンフレット『8,000年前の縄文大集落―函館空港遺跡群　1991～1996―』に掲載	フィルム―中野B遺跡［空中写真（1点）、調査状況（1点）、土器集合写真（1点）、石器集合写真（1点）、フラスコ状ピット土層断面写真（1点）］ プリント―［ヒエ属種子（1点）］	H10. 5. 11 ～7. 3
恵庭市郷土資料館	考古学講座「ユカンボシを探る」での展示	遺物―ユカンボシC15遺跡［周溝のある墓出土の土器［擦文土器（4点）、土師器〈杯〉（3点）、須恵器〈杯〉（1点）、小刀（1点）］、墓出土土器	H10. 5. 18

提　供　先	目　　的	資　料　名・内　容	期　　間
		（5点）、墓出土の土器［土師器〈杯〉（1点）、墓出土の鉄器（鎌・刀子・斧）（3点）、墓出土の双耳杯（1点）］ パネル―ユカンボシC15遺跡［周溝のある墓（1点）、周溝のある墓の調査状況（1点）、竪穴住居跡調査状況（1点）、墓の遺物出土状況（1点）、解説パネル（1点）］	
乃村工藝社　北海道支店	美深町郷土資料館内、遺跡解説パネル用写真	フィルム―栄遺跡［竪穴住居群（2点）、竪穴住居跡［H－38（2点）、H－32（2点）］、土器－深鉢（6点）、土器－高坏（2点）、紡錘車（2点）］	H10．5．18 ～5．29
北海道開拓記念館	第46回特別展「雪と寒さと文化－北のくらしと技術－」展示資料（会期：平成10年7月1日～平成10年8月30日）	遺物―美々8遺跡［カンジキ（2点）、横棒（6点）、曲げ物片（2点）、樺皮製容器（1点）］ フィルム―美々8遺跡［カンジキ（1点）］、ユカンボシC15遺跡［曲げ物（1点）］	H10．5．29
㈱小学館	『古代史の論点』第5巻掲載（1999年2月末発行予定）	プリント－キウス4遺跡［周堤墓（1点）］	H10．5．29 ～11．12
帯広百年記念館	第21回特別企画展『幻の黄金郷 戸賀知登場』に展示　（会期：平成10年7月18日～平成10年8月16日）	フィルム―二風谷遺跡［2号墓出土の装飾付き刀子（1点）、2号墓副葬品出土状況（1点）、1号墓出土の漆椀（1点）］	H10．6．15 ～8．14
㈱世界文化社	『暴かれた古代日本』に掲載（1998年9月20日発行）	フィルム―中野B遺跡［竪穴住居跡（2点）、石鏃発掘状況（1点）、石鏃スタジオ写真（1点）、黒曜石製石器スタジオ写真（1点）］	H10．7．3 ～9．4
㈱創童舎	東北電力㈱発行の広報誌『白い国の詩』（月刊誌）平成10年11月号特集「北国の鉄鍋」に掲載	フィルム―ポロモイチャシ跡［全景（1点）、内耳鉄鍋の出土状況（1点）、内耳鉄鍋（1点）］	H10．7．22 ～11．12
崇教真光　救い主様顕彰記念館建設委員会	平成11年春、岐阜県高山市にオープン予定の博物館（仮称）古代歴史記念美術館で展示室グラフィック、QAシステム、映像ライブラリーに使用	フィルム―忍路土場遺跡［弦楽器（1点）］、白滝遺跡群［石器（11点）］	H10．7．24 ～8．14
ミリオン出版㈱	『RAMBLER』第2号に掲載（1998年11月10日発行）	フィルム―枯梗2遺跡［シャチ形土製品（1点）］	H10．7．27 ～10．6
北海道新聞社　芦別支局	北海道新聞空知版「芦別の縄文人」に掲載	フィルム―滝里4遺跡［竪穴住居跡（1点）］	H10．8．27 ～11．12
日本道路公団北海道支社　用地部	埋蔵文化財発掘等における資料の作成	フィルム―キウス4遺跡B地区［周堤墓（2点）、遺物出土状況（2点）］、キウス4遺跡A地区［拓本（2点）、復元（16点）、土製品（1点）、石器（10点）、口絵（2点）］、キウス5遺跡［礎状木製品（2点）、木製品容器（1点）、墓の副葬品（1点）］	H10．8．26 ～9．9

提供先	目的	資料名・内容	期間
北海道開拓記念館	第47回特別展「うるし文化－漆器が語る北海道の歴史－」展示資料	遺物－柏台１遺跡［赤色顔料の原料（２点）］、新道４遺跡［盆状漆器（１点）］、美々８遺跡［漆塗り椀（１点）］、キウス５遺跡［赤色漆塗り櫛（１点）］、キウス４遺跡［ベンガラ塊（１点）］、赤彩土器（７点）、アスファルトが付着した石鏃（５点）、黒色物質が付着した礫（10点）］ フィルム－社台１遺跡［亀ヶ岡式土器（２点）、朱塗り櫛の出土状況（１点）］、忍路土場遺跡［黒色漆塗櫛（１点）］、新道４遺跡［盆状漆器（１点）］、美々８遺跡［漆塗り椀〈No.129〉（１点）］、湯の里４遺跡［旧石器時代の墓（１点）］、キウス４遺跡［赤彩土器（１点）、アスファルトが付着した石鏃（１点）、黒色物質が付着した礫（１点）］	H10.8.27
ＨＢＣ映画社 映像製作部	渡島支庁主催「縄文の道」フォーラムのＰＲビデオ作成	撮影－中野Ｂ遺跡［土器（１点）、整理作業風景（１点）］	H10.9.11
㈱ニュートンプレス	『Newton』1998年12月号特集「日本大百科」に掲載	フィルム－白滝遺跡［原石と尖頭器（1点）］	H10.9.28 ～11.18
北海道新聞社	「白滝遺跡群発掘、終了へ」（北海道新聞10月３日夕刊）に掲載	プリント－上白滝８遺跡［『白滝遺跡群を掘る！』掲載『上白滝８遺跡と白滝村市街地（西より）』］（１点）］	H10.9.30 ～10.9
名久井文明	「樹皮の文化史（仮題）」に掲載	プリント－忍路土場遺跡［ガンピ製器（１点）、繊維製品（１点）］	H10.10.6
㈱創童舎	東北電力発行の広報誌『白い国の詩』（月刊誌）の集成本（タイトル未定）に掲載	フィルム－中野Ｂ遺跡［航空写真（１点）、住居群（１点）、大型住居（１点）、炉と竪穴（１点）、フラスコ状ピット群（２点）、土器集合写真（４点）］ プリント－中野Ｂ遺跡［ヒエ炭化種子（１点）］	H10.11.2
北海道地図㈱函館営業所	北海道開発局函館開発建設部依頼の函館空港関連の遺跡群のパンフレットに掲載	フィルム－中野Ｂ遺跡［航空写真（１点）、調査風景（１点）、土器集合写真（１点）、石器集合写真（１点）］	H10.11.2
今金町教育委員会	『月刊文化財』10月号掲載	掲載許可－美利河１・２砂金採掘跡［水路（1点）、水路・石垣（1点）］	H10.11.2
青森県埋蔵文化財調査センター	『ふるさと青森の歴史シリーズ⑤、青い森の文化の始まり－旧石器時代・縄文時代草創期・早期・前期』に掲載	フィルム－中野Ａ遺跡［貝殻文土器（１点）］	H10.11.2
㈱小学館	『縄文時代の交流と交易』に（1999年1月発行予定）掲載	プリント－美々４遺跡［ヒスイ玉（１点）］	H10.11.2
高橋　理	岩手県二戸郡一戸町教育委員会より要請された御所野遺跡調査指導の資料	フィルム－キウス４遺跡［盛土遺構（１点）］	H10.11.12

提供先	目的	資料名・内容	期間
㈱ニュー・サイエンス社	『考古学ジャーナル』1998年11月号、特集「考古資料としての赤色顔料」に掲載	プリントー柏台1遺跡［「赤色礫」石皿・すり石類（1点）］	H10.11.12
上磯町教育委員会	上磯町教育委員会主催「かみいその縄文展」で展示	パネルー茂別遺跡［パネル（23点）］	H10.11.12
㈱小学館	「謎解き古代史」シリーズ第2巻『万葉歌のなかの「縄文」エコー』（山口博著）に掲載	プリントーママチ遺跡［土製仮面（1点）］	H10.11.12
北海道新聞社	『北の縄文－南茅部と道南の遺跡』（1998年12月14日発行）に掲載	フィルムー中野B遺跡［遺跡全景（1点）、土器（1点）、石器（1点）］	H10.11.18～12.21
朝日新聞社	『アサヒグラフ古代史総まくり』1998年12月25日号に掲載	撮影許可ーキウス4遺跡［土偶（1点）、ヒスイ製品（3点）］、滝里安井遺跡［クマ形石製品（1点）］ フィルムーキウス4遺跡［盛土遺構（1点）］、滝里安井遺跡［クマ形石製品出土状況（1点）］	H10.11.18
野村　崇	北海道新聞1998年12月12日（夕刊）「北の考古学散歩」	掲載許可ー上泊3遺跡［円筒上層系土器（1点）］	H10.12.10

※平成10年12月末日までに受付けたものを掲載した。

5　刊行報告書等

平成９年度刊行

第120集　『函館市　中野Ｂ遺跡（Ⅲ）』
函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第121集　『上磯町　茂別遺跡』
一般国道228号上磯町茂辺地防災工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第122集　『函館市　西桔梗１遺跡（２）』
一般国道228号函館江差自動車道函館茂辺地道路改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第123集　『滝里遺跡群Ⅷ　滝里安井遺跡・滝里４遺跡（３）』
石狩川水系滝里ダム建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第124集　『千歳市　キウス４遺跡（２）』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

第125集　『千歳市　キウス５遺跡（５）Ａ－２地区』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

第126集　『千歳市　キウス５遺跡（６）Ｂ地区・Ｃ地区』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

第127集　『千歳市　キウス７遺跡（５）』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

第128集　『千歳市　ユカンボシＣ15遺跡（１）』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

第129集　『恵庭市　ユカンボシＥ10遺跡』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

平成10年度刊行予定

第130集　『函館市　中野Ｂ遺跡(Ⅳ)』
函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第131集　『長万部町　富野３遺跡』
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第132集　『恵庭市　ユカンボシＥ７遺跡』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

第133集　『千歳市　ユカンボシＣ15遺跡（２）』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

第134集　『千歳市　キウス４遺跡（３）Ａ・Ｈ・Ｋ・Ｉ地区』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

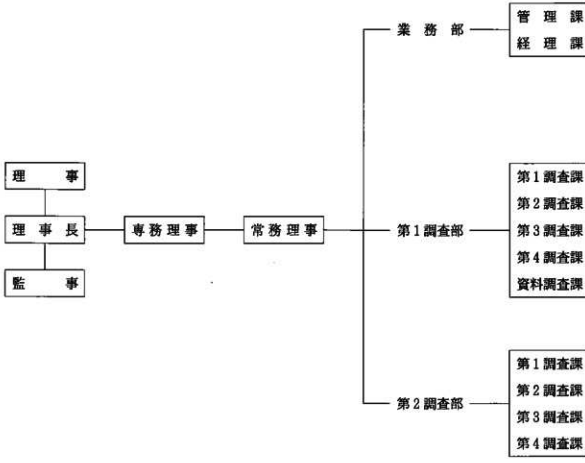
第135集　『千歳市　キウス４遺跡（４）Ａ２地区』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

第136集　『千歳市　キウス５遺跡（７）・キウス７遺跡（６）』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

6　組織・機構

役　員（平成10年6月8日現在）

理事長	大澤　満	
専務理事	佐藤哲人	
常務理事	柴田忠昭	
常務理事	木村尚俊	（北海道教育庁生涯学習部文化課主幹）
理事	石林　清	（北海道教育文化協会理事長）
理事	永井秀夫	（北海学園大学教授）
理事	藤本英夫	（北海道文化財保護審議会委員）
理事	北川芳男	（北海道文化財保護審議会委員）
理事	岡田宏明	（北海学園大学教授）
理事	村山邦彦	（財団法人北海道生涯学習協会副会長）
監事	安達　整	（北海道生涯学習審議会委員）
監事	田中博司	（北海道副出納長兼出納局長）



職　　員（平成10年4月1日現在）

業務部

業務部長	○中田　仁

管理課長	○瀬崎　俊則
主査	葛西　宏昭
主任	礪田　千秋
主事	中村　貴志
主事	小杉　充
参与	小山　一彦
技師	小笠原貞夫

経理課長	○村山　誠己
主査	吉田貴和子
主査	菅野　聡
主事	小笠原　学
主事	今本　宏信
参与	中川　榮一

第1調査部

第1調査部長	○畑　宏明

第1調査課長	○越田賢一郎
主査	立川トマス
主任	○田中　哲郎
文化財保護主事	末光　正卓
文化財保護主事	冨永　勝也
文化財保護主事	福井　淳一

第2調査課長	佐藤　和雄
主任	皆川　洋一
文化財保護主事	袖岡　淳子
文化財保護主事	広田　良成
文化財保護主事	立田　理

第3調査課長	○長沼　孝
主任	越田　雅司
文化財保護主事	○宗像　公司
文化財保護主事	坂本　尚史
文化財保護主事	鈴木　宏行
文化財保護主事	直江　康雄

第4調査課長	遠藤　香澄
主任	村田　大
文化財保護主事	愛場　和人
文化財保護主事	影浦　覚
文化財保護主事	佐藤　剛
文化財保護主事	酒井　秀治

資料調査課長	花岡　正光
主任	藤本　昌子
主任	田口　尚
主任	菊池　慈人
主任	倉橋　直孝

第2調査部

第2調査部長	鬼柳　彰

第1調査課長	○高橋　和樹
主任	土肥　研晶
文化財保護主事	中山　昭大
文化財保護主事	新家　水奈
文化財保護主事	芝田　直人
文化財保護主事	石井　淳平

第2調査課長	西田　茂
主査	三浦　正人
主任	○中田　裕香
主任	鈴木　信
文化財保護主事	吉田裕吏洋
文化財保護主事	大泰司　統

第3調査課長	佐川　俊一
主査	和泉田　毅
主任	藤井　浩
主任	玉邑　肇章
文化財保護主事	阿部　明義
文化財保護主事	山中　文雄

第4調査課長	熊谷　仁志
主査	谷島　由貴
主任	鎌田　望
主任	笠原　興
文化財保護主事	柳瀬　由佳

○：北海道教育庁の派遣職員

調 査 年 報 11

平成10年度

平成11年3月10日発行

編集・発行　財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目
☎011(561)3131

印　　刷　中西印刷株式会社
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号
☎011(781)7501